千葉県八千代市

平沢遺跡ｂ地点

―特別養護老人ホーム建設に先行する埋蔵文化財発掘調査―

２０１１

社会福祉法人　鳳　雄　会
株式会社　アップルズ総合計画
八千代市教育委員会

凡　　例

1　本書は，八千代市教育委員会が平成21．22年度民間開発等埋蔵文化財調査事業として実施した発掘調査の報告書である。

2　本事業は，特別養護老人ホーム建設に伴うもので，事業者である社会福祉法人鳳雄会及び鳳雄会から埋蔵文化財の手続き等について委任された株式会社アップルズ総合計画の二者からの委託を受けて，実施した。

3　遺跡は平沢遺跡のｂ地点で，八千代市上高野字平沢158－1ほかに所在する。

4　調査及び整理は以下のとおり実施した。

確認調査

期　間　平成21年9月24日～11月6日

面　積　562㎡/6,000㎡

担　当　森　竜哉

第1次本調査（平成21年度）

期　間　平成22年1月28日～3月31日

面　積　1,100㎡

担　当　森　竜哉

本整理（報告書印刷刊行を除く）

期　間　平成22年8月1日～平成23年3月10日

担　当　森　竜哉

第2次本調査（平成22年度）

期　間　平成22年4月6日～4月21日

面　積　640㎡

担　当　森　竜哉

5　本書の編集・執筆は森が，第2章第2節，第3章第1節について中野修秀が執筆した。

6　現場の遺構，遺物写真及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。

7　本書の作成・刊行については，整理補助員がおこない，森がまとめた。

［整理補助員］半澤秀子　日向洋子　山下千代子

7　出土遺物，実測図等の資料は，八千代市教育委員会が保管している。

8　本書の遺構番号は，発掘調査時の番号を使用している。

9　遺構名称は，数字とアルファベットを組み合わせ以下のように表記した。

01Ｄ（1号住居跡）　01Ｐ（1号ピット）　01Ｍ（1号溝状遺構）

10　遺構・遺物の縮尺は下記のとおり統一しているが，溝跡（M）は別途表記した。

［遺構］竪穴住居跡（D）1/80　ピット（P）1/40

［遺物］土器1/2・1/3・1/4　石製品・土製品1/3

11　本書使用の地形図等は，下記のとおりである。

第3図　八千代市発行　1/2,500　八千代都市計画基本図に加筆

本　文　目　次

凡　例

第１章　序説
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 1
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 2

第２章　検出された遺構と遺物
　第１節　旧石器時代 …… 5
　第２節　縄文時代 …… 5
　第３節　弥生時代 …… 9
　第４節　ピット・溝状遺構 …… 18

第３章　まとめ
　第１節　縄文時代の様相 …… 26
　第２節　弥生時代の様相 …… 26

挿　図　目　次

第 1 図　市域河川・支谷・台概要図 …… 1
第 2 図　遺跡周辺の地形 …… 2
第 3 図　遺跡位置図 …… 3
第 4 図　平沢遺跡ｂ地点遺構配置図 …… 4
第 5 図　02P･09P 遺構実測図・出土遺物 … 6
第 6 図　縄文土器出土グリット …… 6
第 7 図　包含層及び調査区出土縄文土器　7
第 8 図　01D 遺構実測図 …… 9
第 9 図　01D 出土遺物 …… 10
第 10 図　02D 遺構実測図 …… 11
第 11 図　02D 出土遺物(1) …… 12
第 12 図　02D 出土遺物(2) …… 13
第 13 図　03D 遺構実測図 …… 14
第 14 図　03D 出土遺物(1) …… 15
第 15 図　03D 出土遺物(2) …… 16
第 16 図　04D 遺構実測図・出土遺物(1) … 17
第 17 図　04D 出土遺物(2) …… 18
第 18 図　10P 遺構実測図・出土遺物 …… 19
第 19 図　01・03・04・05P 遺構実測図 … 21
第 20 図　06･07･08･11P
　遺構実測図･出土遺物 … 22
第 21 図　01M 遺構実測図・出土遺物 …… 23
第 22 図　02M 遺構実測図 …… 24
第 23 図　02M 土層断面図・出土遺物 … 25

表　目　次

01D 住居跡遺物観察表 …… 27
02D 住居跡遺物観察表 …… 28
03・04D 住居跡遺物観察表 …… 29
報告書抄録 …… 30

写　真　図　版　目　次

図版 1 ～ 9　遺構
図版 10 ～ 13　遺物

第1章　序　　説

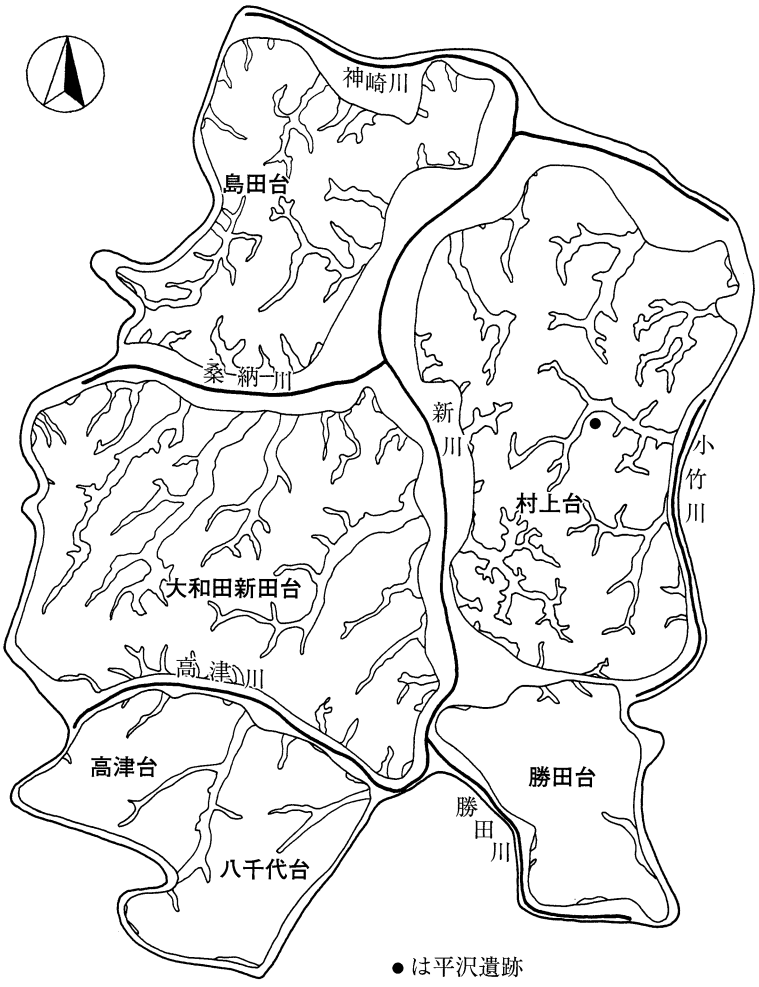
第1節　調査に至る経緯

平成21年7月，八千代市上高野字平沢158－1ほかの土地について蛭間秀夫，蛭間辰夫，山崎重信の三氏から特別養護老人ホーム建設の計画に先行して，「埋蔵文化財の取扱いについて」の確認依頼文書が八千代市教育委員会(以下,「市教委」と略)に提出された。確認地は一部周知の埋蔵文化財包蔵地で，№217平沢遺跡の範囲内であり，東隣接地の発掘調査において，弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されていることから，当該地に遺構が広がる可能性が高いと判断された。同月，遺跡が所在する旨三氏に回答した。その後，社会福祉法人鳳雄会　理事長　黒田明美氏を事業者として，8月末に文化財保護法第93条第1項の規定による土木工事の届出が提出され，同年9月24日に確認調査に着手した。

確認調査は，市教委が平成21年度国庫・県費補助金を受けて実施した。その結果，縄文時代土坑2基，弥生時代竪穴住居跡9軒，古代溝状遺構1条を検出した。結果をもとに，協議範囲2,182㎡の内，現状保存442㎡を除いた1,740㎡について，本調査を実施することとなった。諸準備が整った平成22年1月28日，調査に着手した。

第2節　調査の方法と経過

確認調査の成果から，表土以下において新期テフラ層，暗褐色土層，ソフトロームという基本層序であり，遺物包含層が部分的に遺存すると想定されたため，基本的に暗褐色土層上面を確認面とした。

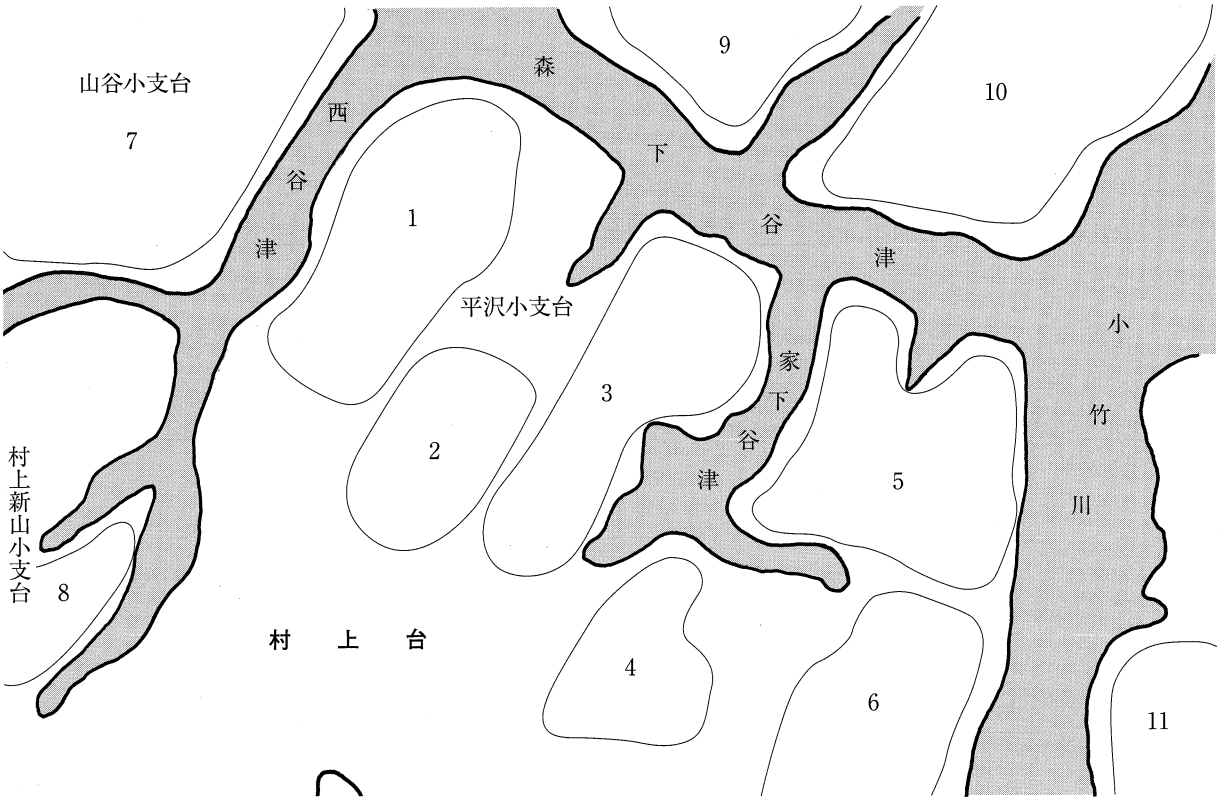


第1図　市域河川・支谷・台概要図

調査区の設定は，公共座標の南北方向に沿って20m方眼を設定し1グリッドとした(第6図)。1グリッド内を5m方眼として16分割し小グリッドとした。呼称方法は南北にアルファベット，東西にアラビア数字とし，A1-1～16Gというように5m範囲をもって遺構外出土遺物の取り上げや遺構位置を呼称した。

調査は21年度．22年度に実施し，各々第1次．第2次本調査としている。期間については凡例に記した。第1次調査は，1月28日～2月3日重機による第1回表土剥ぎ，2月4日～16日01M．01P調査・実測，2月17日～26日第2回表土剥ぎで，並行して02M．01D～04D．ピット調査を3月31日まで実施した。

第2次調査は4月6日から02M．01D～04D遺物取り上げ，ピット



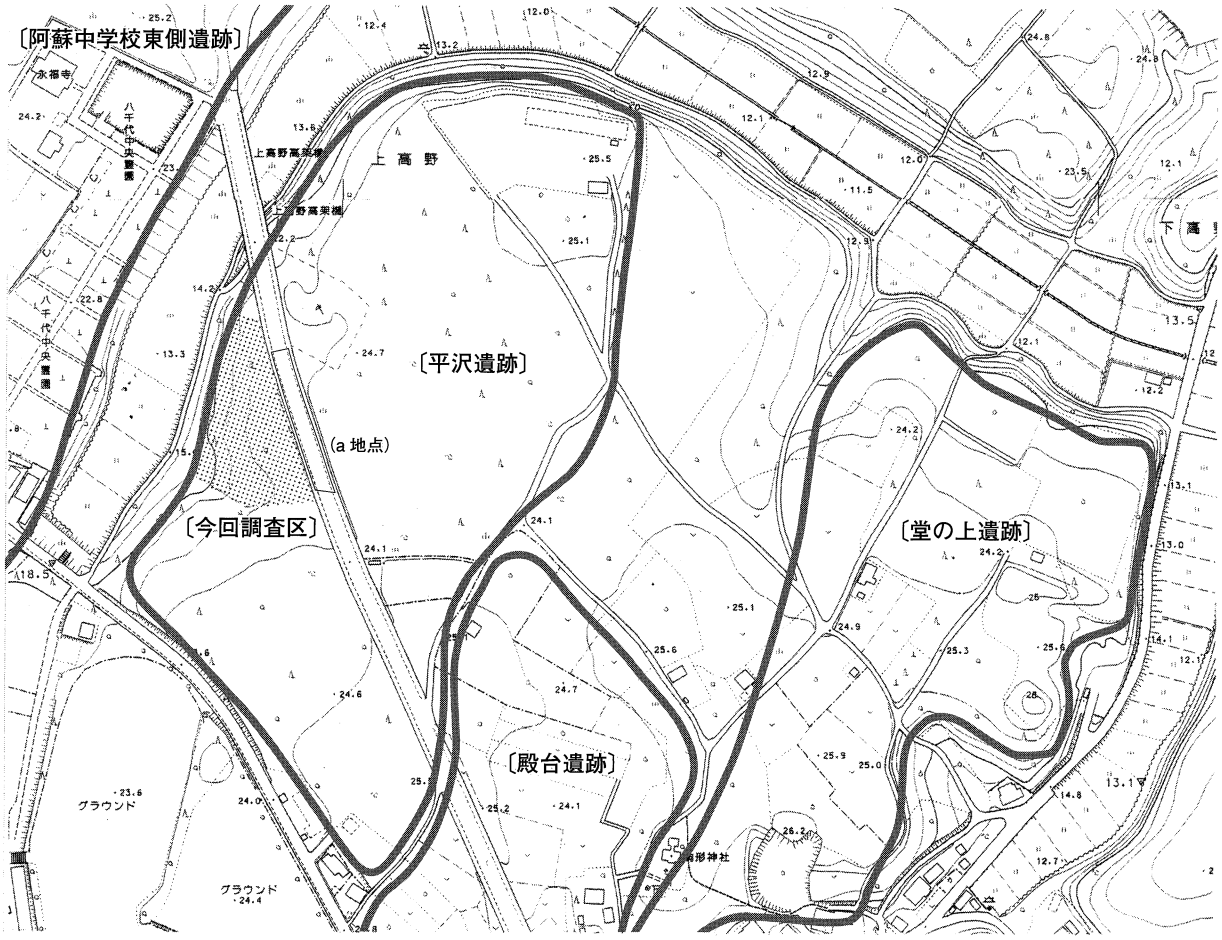
第２図　遺跡周辺の地形

実測，４月21日までに実測，包含層調査，遺跡全景写真撮影，出土遺物の水洗等を行い，現場作業を終了し，引渡しを行った。

第３節　遺跡の位置と環境

第１図に示したように，市内の河川については，市域中央を流れる新川を核として，その各々が新川に合流している神崎川・桑納川・高津川と市域を画する勝田川・小竹川があり全て印旛沼に流れ込んでいた。各河川に開析された台が大きく４つ，細別すると６つある。これら各台の形状は南西部で高く，東から北に向って高度を減じている。平沢遺跡は，市域東部村上台中央で小竹川に至る森下谷津を北に見下ろす台地縁辺部に位置する。

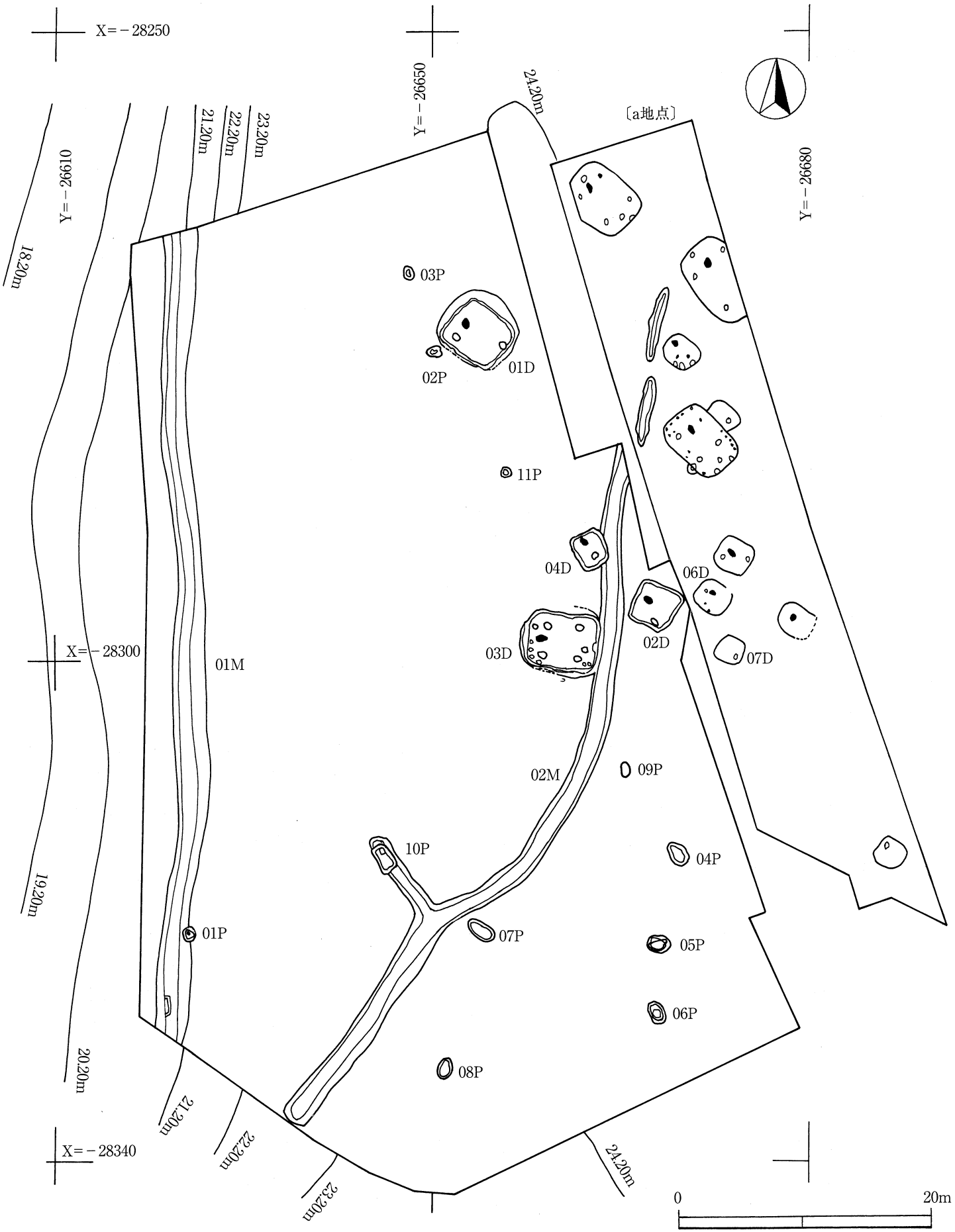
平沢遺跡周辺の遺跡について概観してみる（第２図参照）。**1**は平沢遺跡で，縄文時代中・後期，弥生時代後期の土器等が出土する。これまでに都市計画道路敷設に先行してａ地点の確認及び本調査が平成６・７年に実施された。その結果，縄文時代早・前・中・後期の土器片・石鏃，弥生時代後期の竪穴住居跡10軒，古墳時代前期土師器等の遺構・遺物が検出された。今回の調査区は西側に隣接しており，縄文時代，弥生時代について同様の遺構・遺物が発見された。**2**は殿台遺跡で，包蔵地として奈良・平安時代の土師器が出土する。平沢遺跡ａ地点と併せて道路敷設に伴う調査が実施された。結果は，旧石器時代遺物集中地点２ヵ所，縄文時代後期土器片，奈良・平安時代須恵器片，近世土器片等の遺構・遺物が検出された。**3**は堂の上遺跡で，縄文時代，奈良・平安時代の包蔵地として土器片が出土している。**4**は笹堀込遺跡で，奈良・平安時代の包蔵地として土器片が出土している。**5**は上高野白幡遺跡で，縄文時代中・後期，弥生時代，古墳時代前・中期，奈良・平安時代の各時代の土器等が出土している包蔵地となっている。**6**は毘沙遺跡で，奈良・平安時代の包蔵地として土師器が出土する。７～11は谷津



第 3 図　遺跡位置図

を挟んで対岸の遺跡である。**7** は阿蘇中学校東側遺跡で，八千代市遺跡調査会が墓地造成に先行して昭和 54・56・58 年の 3 次に亘って発掘調査を実施した。その結果，縄文時代埋甕 1 基，弥生時代の竪穴住居跡 19 軒，方形周溝墓 2 基，炉跡 3 基，土坑 37 基が公表されている。また，財団法人千葉県文化財センター及び千葉県教育振興財団が道路敷設に先行して平成 10・16・17 年に発掘調査を実施している。結果として，旧石器時代石器集中地点 3 ヵ所，縄文時代土坑 5 基，弥生時代竪穴住居跡 1 軒，溝 1 条が検出された。**8** は村上新山遺跡で，部分的調査が昭和 53 年に実施されるが，詳細は不明である。包蔵地として縄文時代中期，奈良･平安時代土師器が出土している。**9** は丸山遺跡として，縄文時代，奈良･平安時代の包蔵地である。**10** は下高野新山遺跡で，病院建設及び増設として 4 次に亘って八千代市教育委員会および遺跡調査会が本調査を実施している。結果として，縄文時代早期炉穴 46 基･土坑 50 基･竪穴住居跡 1 軒・竪穴状遺構 2 軒・早期前葉～後葉包含層，古墳時代後期竪穴住居跡 1 軒，歴史時代土坑 1 基，中世地下式坑 4 基が検出された。主体となる時代は，縄文時代早期前葉～後葉である。**11** は佐倉市の青菅木ノ宮遺跡で，縄文時代中期，古墳時代後期の包蔵地である。

［参考文献］
平沢・殿台遺跡　1996　八千代市教育委員会　『八千代市埋蔵文化財調査年報－平成 6 年度版－』
阿蘇中学校東側遺跡　2007　森本和男　『八千代市向境遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡』千葉県土整備部　財団法人千葉県教育振興財団
下高野新山遺跡　2009　秋山利光　『千葉県八千代市下高野新山遺跡』医療法人心和会　八千代市遺跡調査会
その他の遺跡　1997　財団法人千葉県文化財センター　『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)』－東葛飾・印旛地区（改訂版）－



第４図　平沢遺跡ｂ地点遺構配置図

第２章　　検出された遺構と遺物

第１節　旧石器時代

今回の野外調査では，下層調査を行っていない。整理作業段階において，石器２点が抽出されたため以下に報告する。なお，岩種鑑定は行っていないため，石材は報告者の判断によった。

石器（図版 10）

１は尖頭器で先端部を欠損する。両側縁に剥離調整を加えている。石材は珪質頁岩か。長さ 3.3cm，幅 1.6cm，厚さ 0.47cm，重量 3.3g。２は剥片である。石材は珪質頁岩か。長さ 2.7cm，幅 1.1cm，厚さ 0.7cm，重量 2.3g。両者ともに，01 D住居跡覆土中より出土した。

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構は，わずかにピット２基で，その分布状況は特に集中することなく，散漫である。今回検出のピット中，確実に縄文時代の所産と認定できるのは，02 P・09 Pの２基のみであった。

02 P（第５図）

位置　C５－12グリッド。**重複関係**　単独。**長軸**　N -89° - W。**平面形**　上部，底部とも不整楕円形を呈する。**壁・底面**　壁は垂直気味に立ち上がり，底面はやや丸みを帯び，比較的凹凸は少ない。**規模**　1.14 m × 0.78 m，検出面からの深さは 0.34m を測る。**覆土**　上部は撹乱を受けている。下部（下層）はローム・黒色土・炭化物を含む暗褐色土である。底面で炭化物を検出した。覆土下層の由来は，自然堆積ではない可能性がある。**遺物**　縄文式土器６点が出土。第５図１～３は同一個体か。堀之内１式の縄文系粗製土器で，地文縄文として２段 RL を施す。同図４～６は深鉢の胴下半片である。

09 P（第５図　図版９）

位置　D６－８グリッド。**重複関係**　単独。**長軸**　N -2° - W。**平面形**　やや不整な楕円形を呈する。**壁・底面**　遺構検出面からの掘り込みが浅く，壁は極めてゆるやかに立ち上がり，底面を含めた断面形状は，浅い皿状を呈する。**規模**　1.03 m × 0.68 m，検出面からの深さは 0.04m を測る。**覆土**　褐色土の単一土層で，焼土粒・焼土ブロックを混入する。**遺物**　縄文式土器４点が出土。**所見**　本跡の性格は，機能的に見て「屋外炉」の可能性がある。ただし，底面が焼けていない点，覆土中の焼土混入量が，比較的少ない点などを踏まえると，長期間かつ頻繁な使用は考えられない。

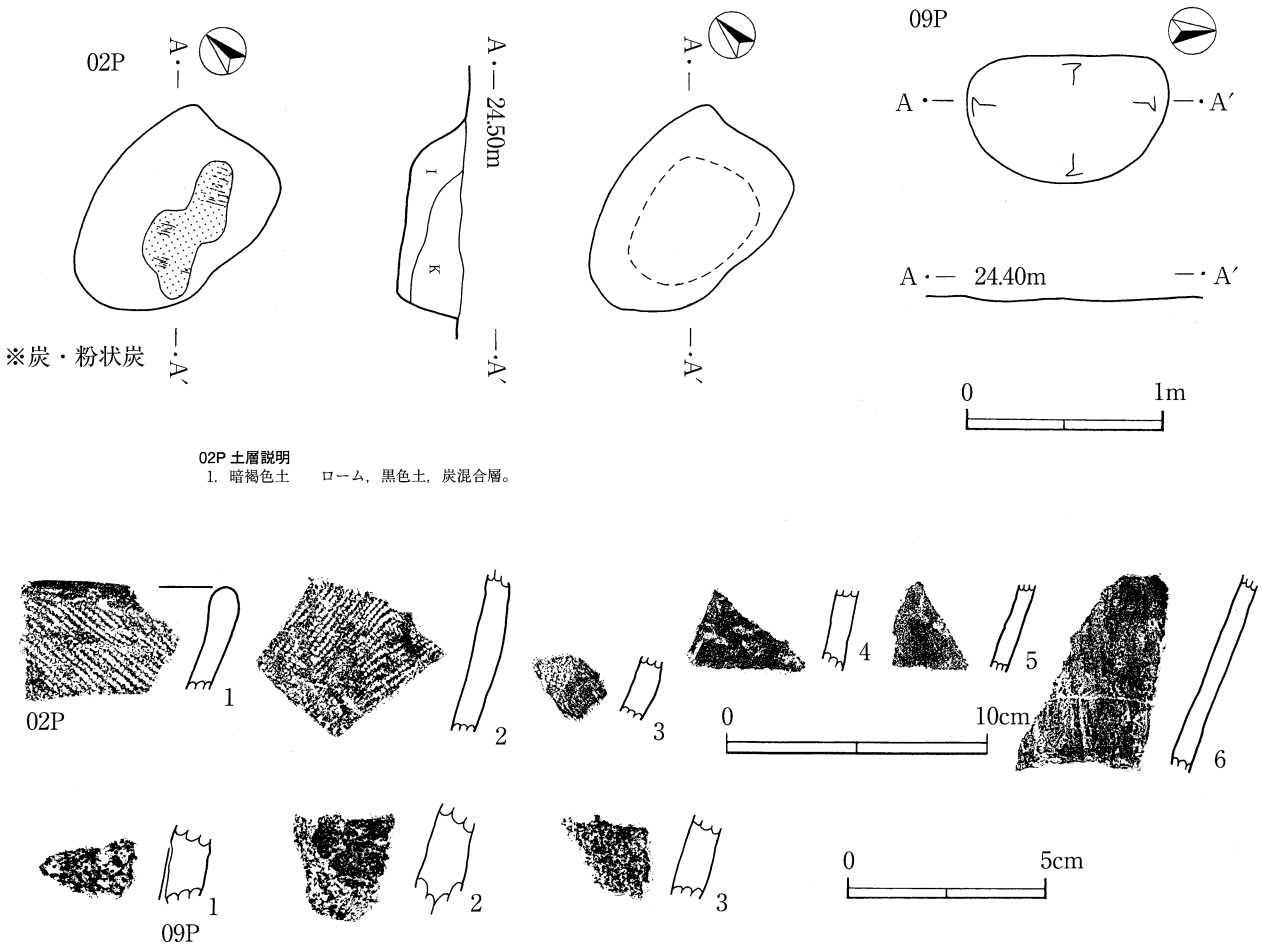
遺物包含層（第６・７図　図版９・10）

今回の調査では，遺構検出面がソフトロームよりも上層である例が多かった。そして，遺構プランの確認の時点で既に縄文式土器片が出土し，縄文時代の「遺物包含層」の存在が予測された。そのため，弥生時代以降の遺構調査を終了後，旧表土を人力で掘り下げることで，「遺物包含層」の調査を行った。

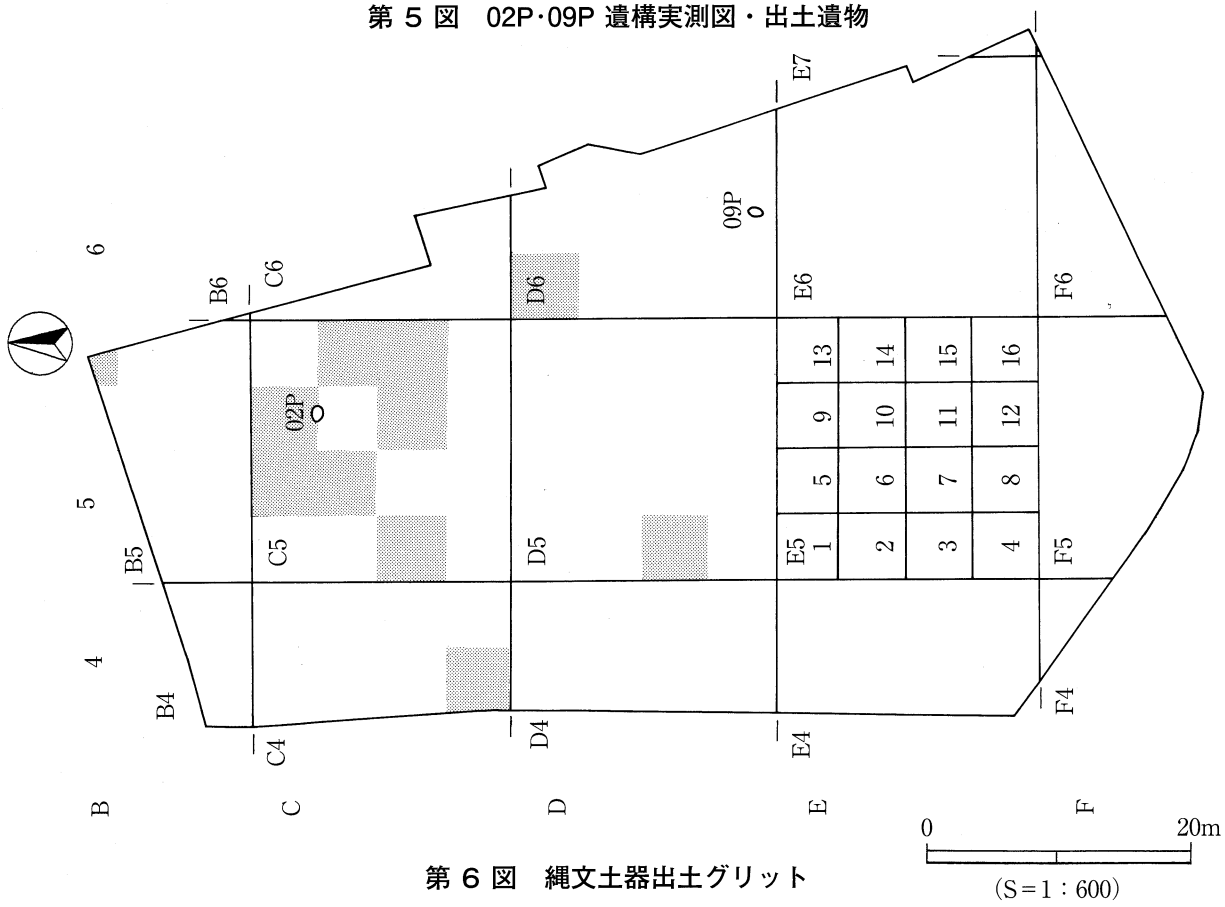
平面分布的には，C５グリッド（大グリッド）に集中が認められた。垂直分布的には，あまり極端な出土レベルの上下差は認められず，基本層序の新期テフラ層の下部に，ほぼ相当するものである。時期的には，縄文早期～後期までを含んでおり，垂直分布で述べたように，型式学的な先後関係を裏付けるような，層位学的な出土状態（古い時期の土器が下層，新しい時期の土器が上層から出土する）を示してはいなかった。その他，後世の遺構覆土中からも，縄文式土器が出土している。

出土総数は 159 点で，遺物包含層及び後世の遺構覆土出土分を含め，これが抽出できた全てである。

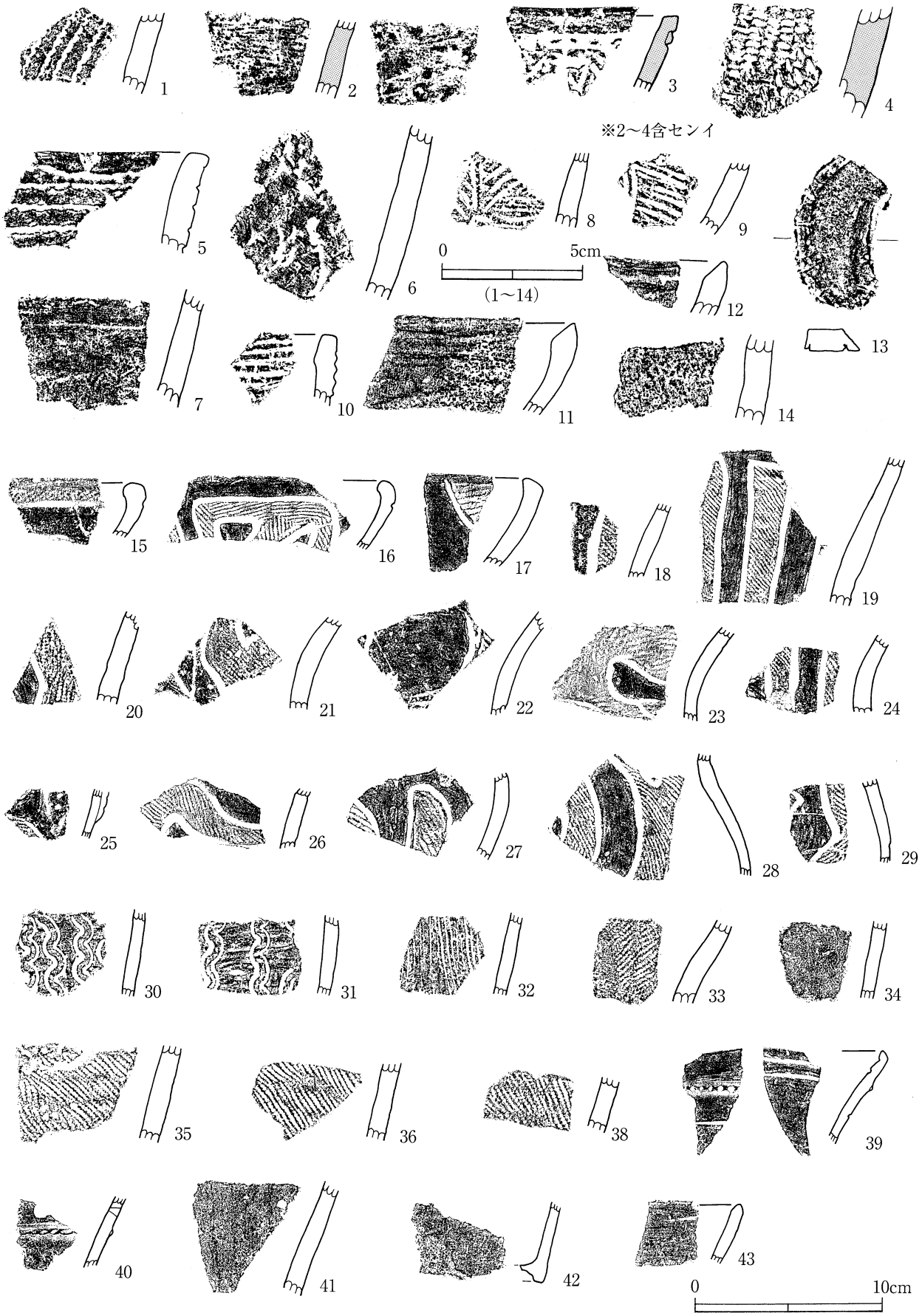
その内訳は（田戸下層式１点・条痕文系１点・黒浜式４点・諸磯ａ式３点・浮島式～興津式 17 点・五領ヶ台式４点・阿玉台式１点・加曽利Ｅ式１点・称名寺式 89 点・堀之内式 57 点・加曽利Ｂ式１点・型式不明６点）となっている。



第 5 図　02P·09P 遺構実測図・出土遺物



第 6 図　縄文土器出土グリット



第７図　包含層及び調査区出土縄文土器

1 は田戸下層式土器で，フネガイ属の貝殻を原体とする縦位の貝殻復縁文を，横位かつ帯状に施す。

2 は条痕文系土器。表裏面に条痕を施すが，条痕は細かく，かつ浅いものである。これらから，使用した原体は貝殻ではない可能性が高い。

3･4 は黒浜式土器。3 は口縁片で，口縁下に狭小な無文部を挟み，爪形文を施し，その下は肋骨文か。4 は地文のみの胴部片である。羽状縄文を施すが，原体は 2 段 RL と 2 段 LR という異種を使用している。花積下層式に顕著な属性であるが，本例は黒浜式土器である。

5･6 は諸磯 a 式土器。同一個体で，地文縄文施文後，多截竹管を原体として「米字状文」を施文する。

7 ～ 9 は浮島式～興津式土器。7 は口縁片で，口縁下に「有節平行線文」を重畳施文するものである。浮島Ⅰb 式。8 はハマグリを原体とした波状貝殻文を施文した胴部片で，浮島Ⅱ式～Ⅲ式。

10 ～ 13 は五領ヶ台式土器（八辺式土器を含む）で，いずれも口縁部片。10 は集合沈線を施したものである。12・13 とも内削ぎ気味の口唇部形態を呈し，口縁の内側に稜（内稜）を有するもので，口縁部は無文帯となる。このうち，12 は口縁が内湾気味に立ち上がり，典型的な例である。これらは，東関東地域を中心にプロパーな「八辺式土器」で，細別時期としては八辺式 3 期に相当しよう。

14 は阿玉台式土器。胴部片で，胎土に雲母粒を少量含む（いわゆる「雲母混入型」）。無文部分のため，属性には乏しいが，阿玉台Ⅰb 式に相当しよう。

15 ～ 34 は称名寺式土器。15 ～ 17 は口縁片。16・17 は口縁部に無文帯を有するが，15 は直下から磨消縄文による意匠を施す。18 ～ 26 は胴上部片で，25 のみ小形深鉢。うち 18 は意匠の描線である，沈線を施文するタイミングが早く，かつ太沈線気味となる。25 は石井寛氏の定義する「隆帯垂下類型」で，今回はこれ 1 点のみである。27 ～ 29 は胴中位から胴下半の破片。今回は胴部片を含め，精製土器の全てが「縄文充填」で，使用原体は 17・23（同一個体）が 1 段 L を用い，それ以外はかなり細めの 2 段 LR を用いている。30 ～ 34 は，称名寺式土器に伴う粗製土器を集めた。30 ～ 32 は条線系粗製土器の胴部片。30・31 は多截竹管の内側を使用した蛇行沈線を，縦位に密接施文するもので，厳密には条線ではない。32 は櫛歯状工具による縦位の条線を地文とする。33 は縄文系粗製土器，34 は無文系粗製土器の胴部片。33 の使用原体は 2 段 RL である。中期の加曽利 E 式土器の系譜を引く。

35 ～ 42 は堀之内式土器（37 は欠番）。35・36・38 は堀之内 1 式の縄文系粗製土器で，02 P 出土土器と同一個体である。39 ～ 42 は堀之内 2 式で，39・40 が精製深鉢である。ともに口縁下に横位の隆帯を貼付し，隆帯上に細かなキザミを施す。この下は磨消縄文を施文する。39 はさらに，口縁内面に内沈線と呼ばれる 2 条の沈線を施している。

43 は加曽利 B 式土器で，これ 1 点のみである。口縁部片で，無文部に相当する。精製土器のいずれかの類型に該当しようが，小片のため決定できない。加曽利 B2 式土器に比定されるものであろう。

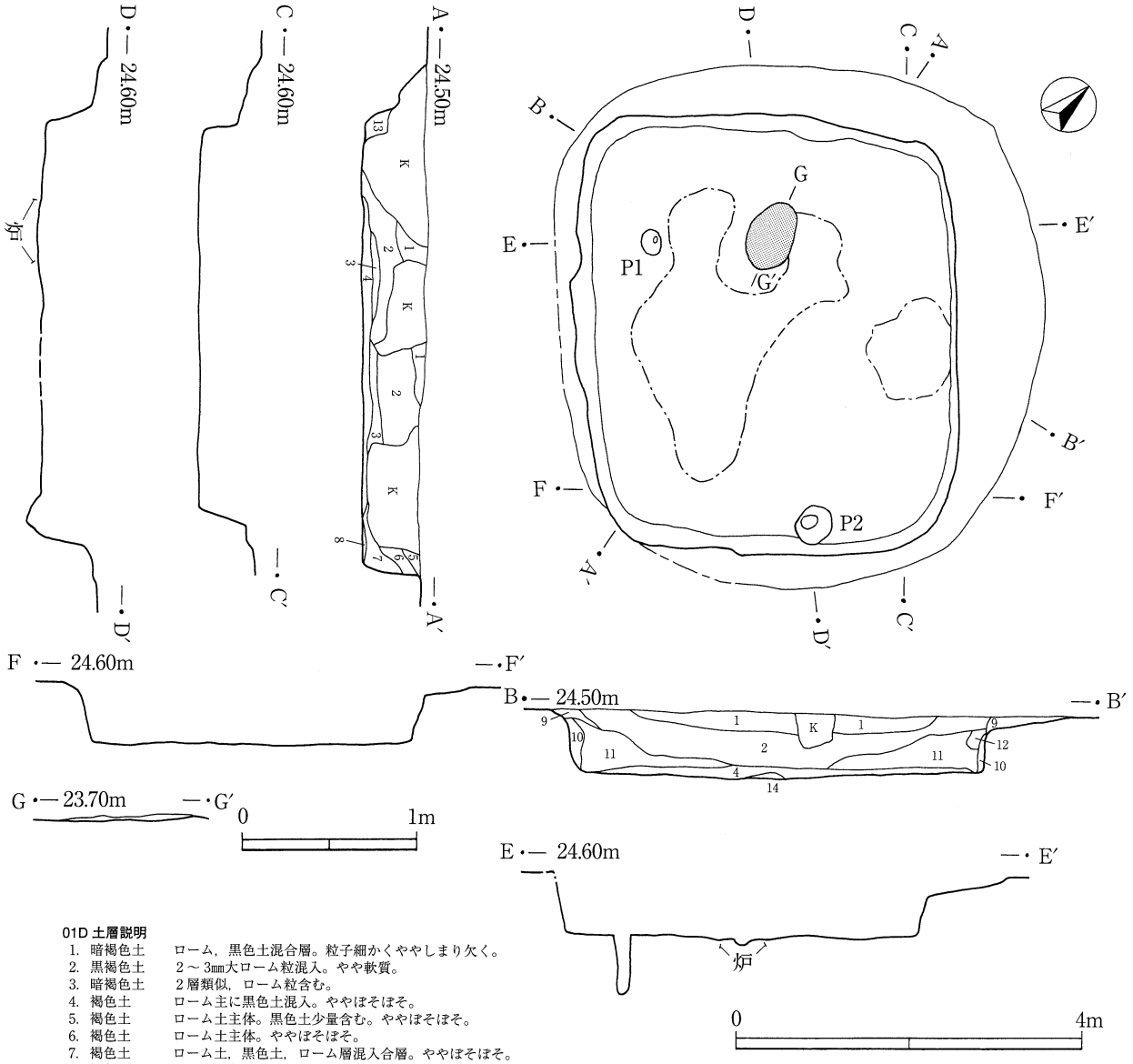
第３節　弥生時代

今回の調査では，中期に想定される土坑（10P）１基，後期の竪穴住居跡（01D,02D,03D,04D）４軒を検出した。竪穴住居跡は，前回調査のａ地点（第４図参照）南側の一群に属する02D,04Dと各々が単独の01D,03Dがある。

０１Ｄ住居跡（第８・９図　図版３・11）

位置　Ｃ５－13Ｇを中心に検出。**主軸方位**　Ｎ－74°－Ｗで大きく西に傾く。**重複関係**　単独。

平面形　外側は浅い掘り込みで方形状の円形。内側は南北にやや長い隅丸長方形である。



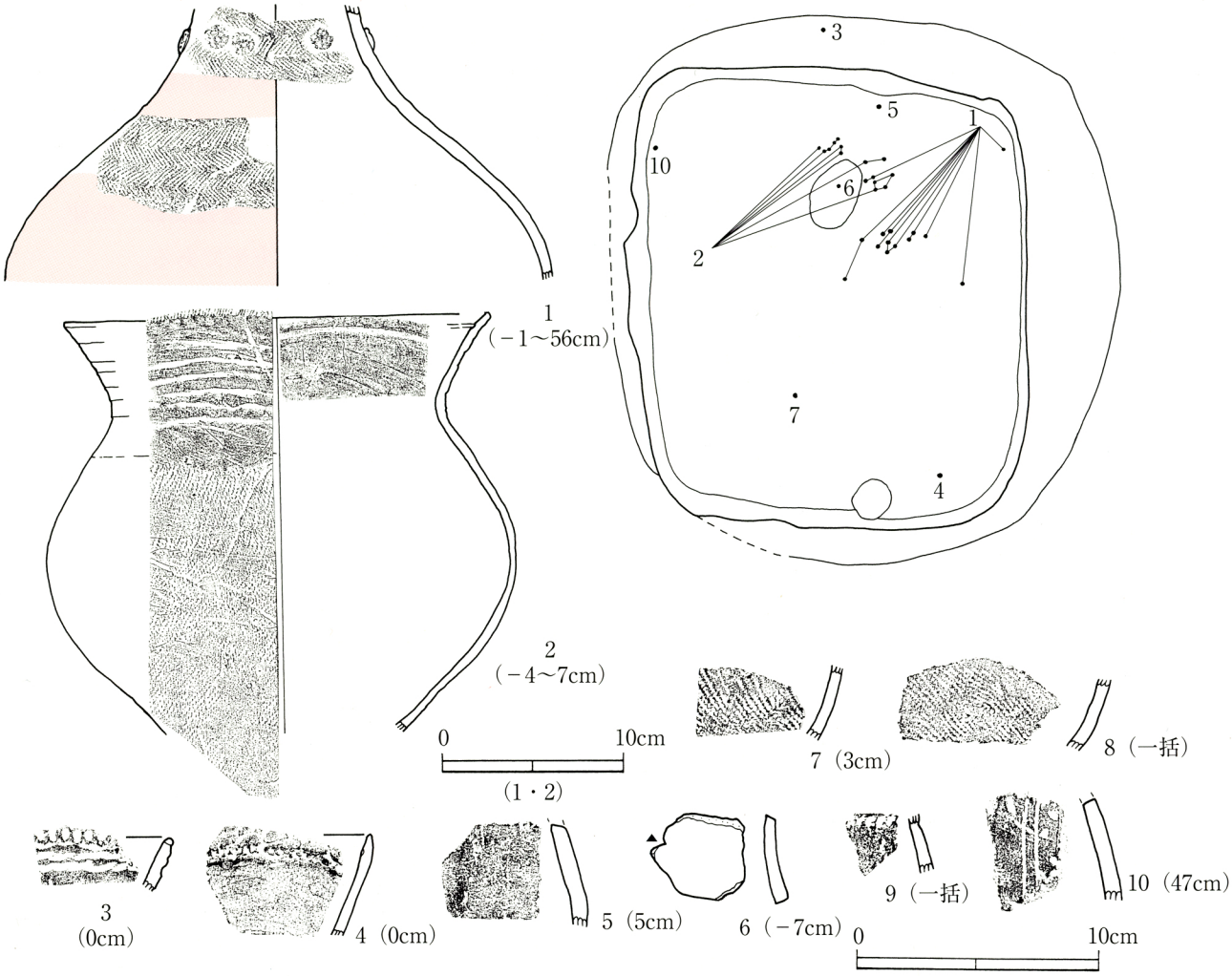
01D 土層説明

1. 暗褐色土　ローム，黒色土混合層。粒子細かくややしまり欠く。
2. 黒褐色土　２～3㎜大ローム粒混入。やや軟質。
3. 暗褐色土　２層類似，ローム粒含む。
4. 褐色土　ローム主に黒色土混入。ややぼそぼそ。
5. 褐色土　ローム土主体。黒色土少量含む。ややぼそぼそ。
6. 褐色土　ローム土主体。ややぼそぼそ。
7. 褐色土　ローム土，黒色土，ローム層混入合層。ややぼそぼそ。
8. 褐色土　ローム土主体。黒色土少量含む。
9. 暗褐色土　ローム，黒色土混合。粘性あり。しまる。
10. 褐色土　ローム土主体。しまる。
11. 褐色土　黒色土，２～3㎜大ローム粒，ローム土混合。ややぼそぼそ。
12. 褐色土　11層類似。ややしまる。
13. 褐色土　ローム主体。ロームブロック混入。
14. 暗褐色土　焼土ブロック混入。

01D 炉土層説明

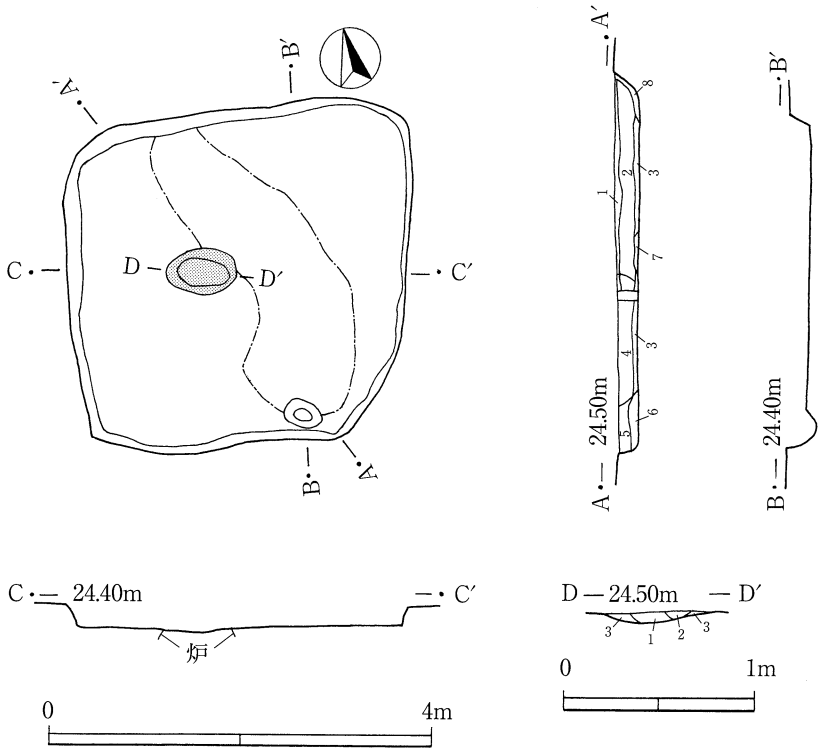
1. 暗褐色土　３～5㎜大焼土粒混入。

第８図　01D 遺構実測図



第９図　01D 出土遺物

規模　外側で 6.15m × 5.50m，内側で 5.15m × 4.35m。**確認面**　暗褐色土中である。確認面からの深さは外側 0.15m，内側 0.65m ～ 0.75m。**壁**　床面から 100° 程度のやや広がる角度をもって立ち上がる部分とほぼ直立する部分が見られる。**床**　ハードロームを 0.2m 程度掘り込んで地床としている。硬化面は中央と東壁際に見られ，前者がより締まっている。**炉**　長軸 0.8m ×短軸 0.5m の楕円形で，若干窪む程度の掘り込みである。炉面は全体にロームが赤色化し，よく使用されている。**ピット**　P1.2 があり，P1 が柱穴で深さ 0.7m，覆土は暗褐色土で黒色土・ローム混合層。２～３㎜大ローム粒を含んでいる。P2 が出入口ピットか。深さ 0.2m。覆土はローム主体の褐色土である。**住居覆土**　外側でローム・黒色土混合の暗褐色土，内側は，上層から下層についてはレンズ状堆積の黒色土，壁際から中央部分では同様のレンズ状堆積の褐色土である。このことから，住居廃絶後，周辺土堤部分の自然埋没ないし人為的埋め戻し後放置され，落ち葉等により埋まり切ったと想定される。当初平面形はややいびつな円形で，周縁部で暗褐色土，中央部で黒色土であった。全体に下げていく中で，浅い掘り込みと住居本体の深い掘り込みを持つことがわかった。ここでは外側としたが，この浅い掘り込みは，住居本体に付随した施設と想定されよう。**遺物出土状態**　全体に，住居本体部分の埋没段階に混入した土器片主体である。壁際では上～中層，中央部分で下層からの出土傾向がみられる。平面的には，炉とその東側部分での出土傾向がみられる。



02D 土層説明

1. 暗褐色土　ローム，黒色土混合層。粒子細かい。
2. 暗褐色土　3～5㎜大ローム，ローム粒，土器包含。しまる。
3. 褐色土　ローム土主体。黒色土少量含む。
4. 暗褐色土　ロームブロック，ローム。
5. 暗褐色土　ローム，黒色土混合。粒子細かく，しまる。
6. 暗褐色土　黒色土主にローム粒混入。粒子細かい。
7. 褐色土　焼土粒，ローム粒混合。しまる。
8. 暗褐色土　ローム，黒色土混合。粒子細かく，しまる。

02D 炉土層説明

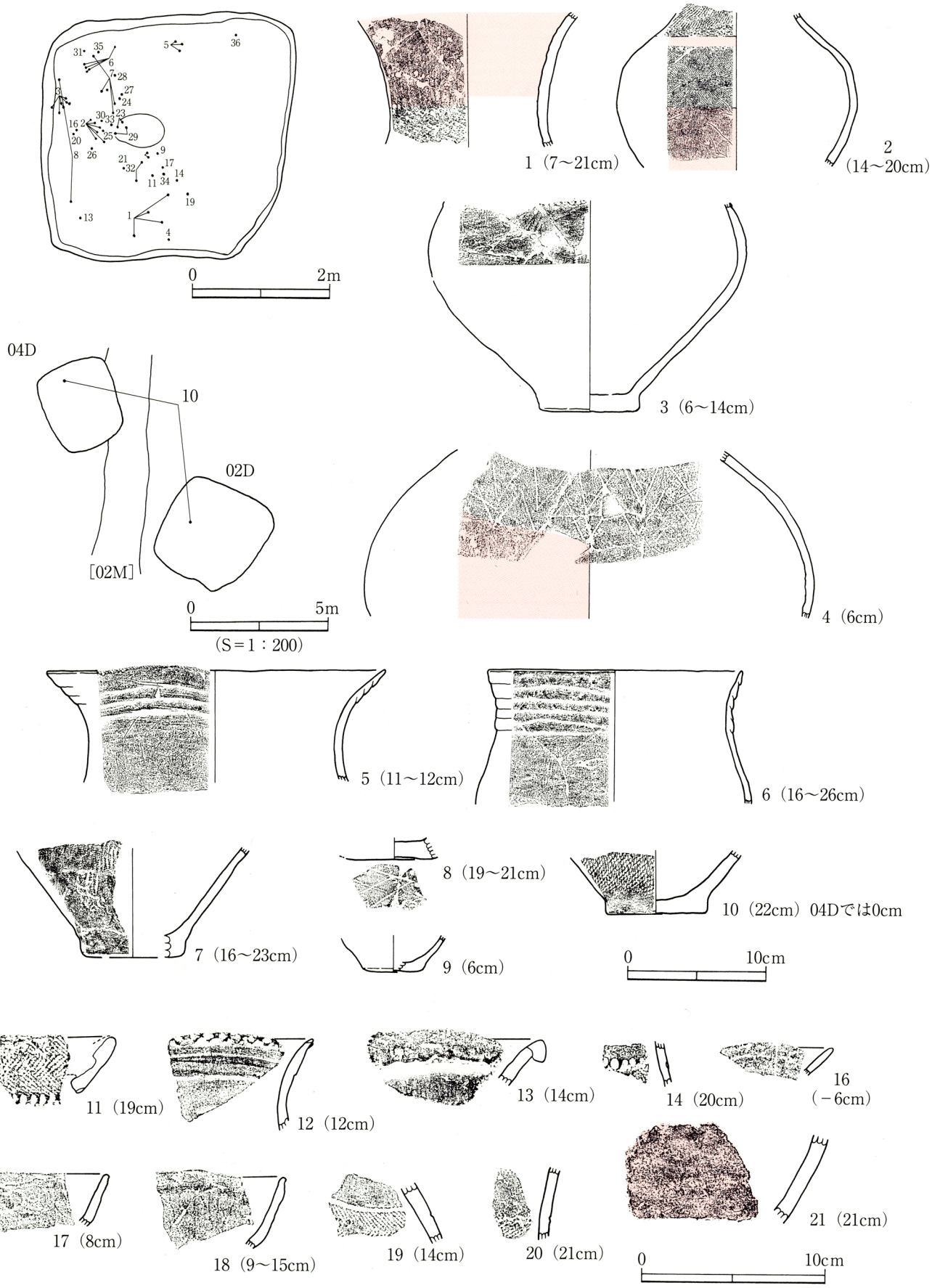
1. 褐色土　焼土粒，黒色土，ローム土混合層。
2. 赤褐色土　焼土粒，ブロック主体層。
3. 褐色土　ローム主に焼土粒点在る。

第 10 図　02D 遺構実測図

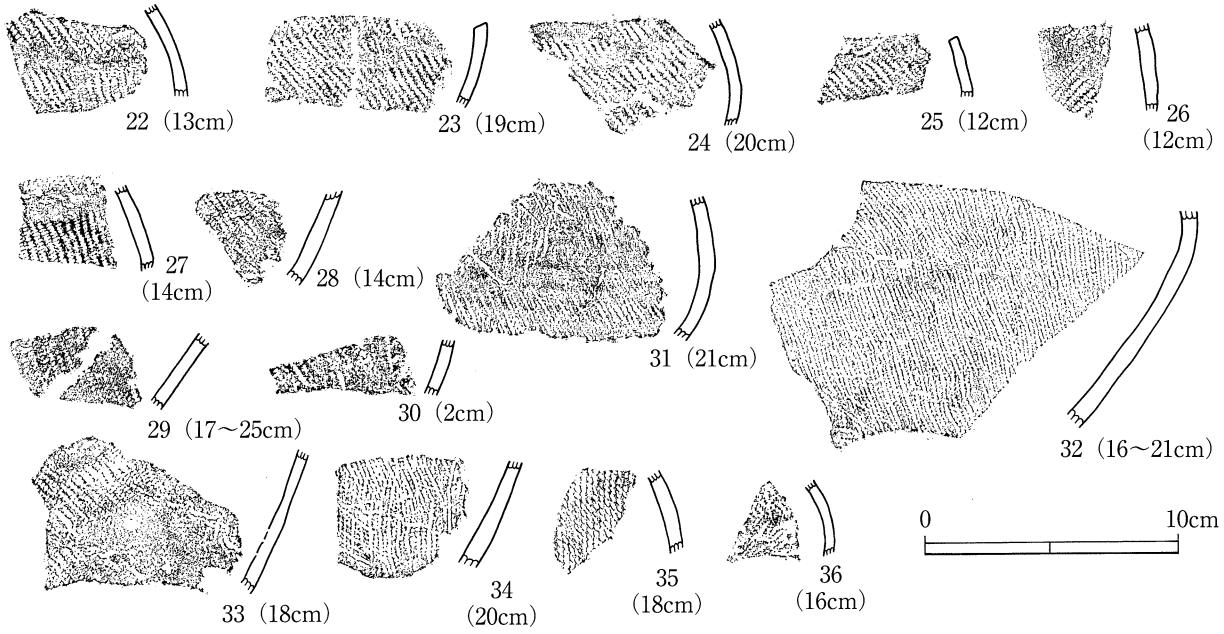
０２Ｄ住居跡（第 10 ～ 12 図　図版４・11）

位置　Ｄ６－ 10 Ｇを中心に検出。**主軸方位**　Ｎ -70° - Ｗで大きく西に傾く。**重複関係**　単独。

平面形　隅丸の不整方形。**規模**　3.55m × 3.60m。**確認面**　暗褐色土中である。確認面からの深さは 0.25m。**壁**　床面からほぼ直立する部分とやや緩い傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。**床**　ソフトロームを 0.1m 程度掘り込んで地床としている。硬化面は P1 と炉を結んだ帯状に見られ，やや黒く若干踏み締められる。**炉**　長軸 0.8m ×短軸 0.5m の楕円形で，5cm 程度の掘り込みである。覆土は焼土混じりの褐色土で，炉面は部分的に赤色化するが，あまり使い込まれてはいない。**ピット**　P1 があり深さ 0.3m，覆土は暗褐色土で黒色土・ローム混合層。焼土粒をごく少量含み，締まっている。硬化面の平面状況から出入口ピットに想定できよう。**住居覆土**　平面形では中央から北・西側にかけては楕円形状にローム・黒色土混合の暗褐色土，その周縁の東壁と南壁では，褐色土が観察された。01D 住居跡にみられた土層断面による中央部分の黒色土と周縁部分の褐色土の状況と同様の，周堤部分の土層と自然埋没層を想定できよう。**遺物出土状態**　平面的には，炉周辺と北・西壁側での出土が多い。層位的には，２層上位から中位の出土であり，全体に自然埋没段階に混入したものである。



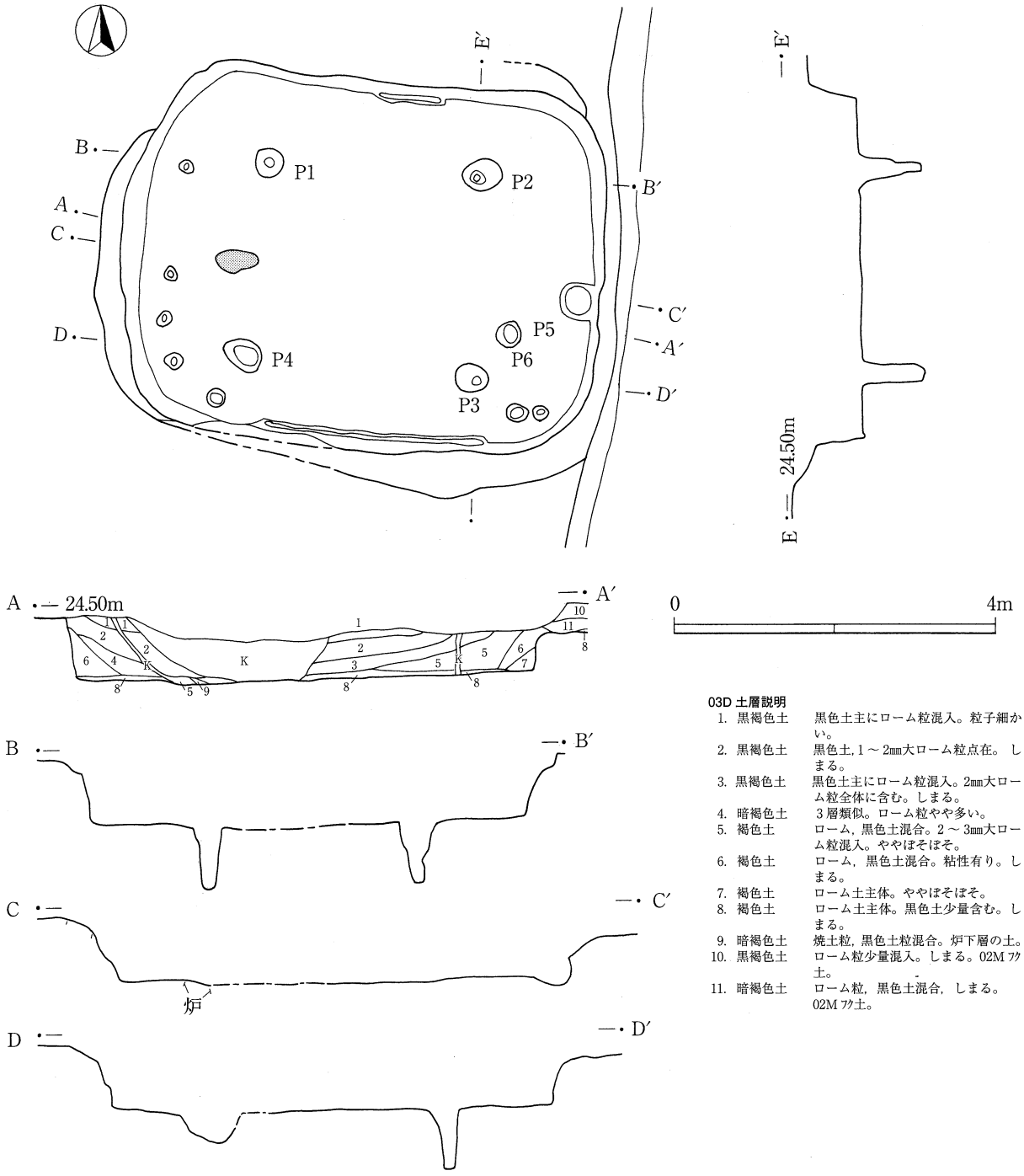
第 11 図　02D 出土遺物(1)



第 12 図　02D 出土遺物(2)

０３Ｄ住居跡（第 13 ～ 15 図　図版 5. 12）

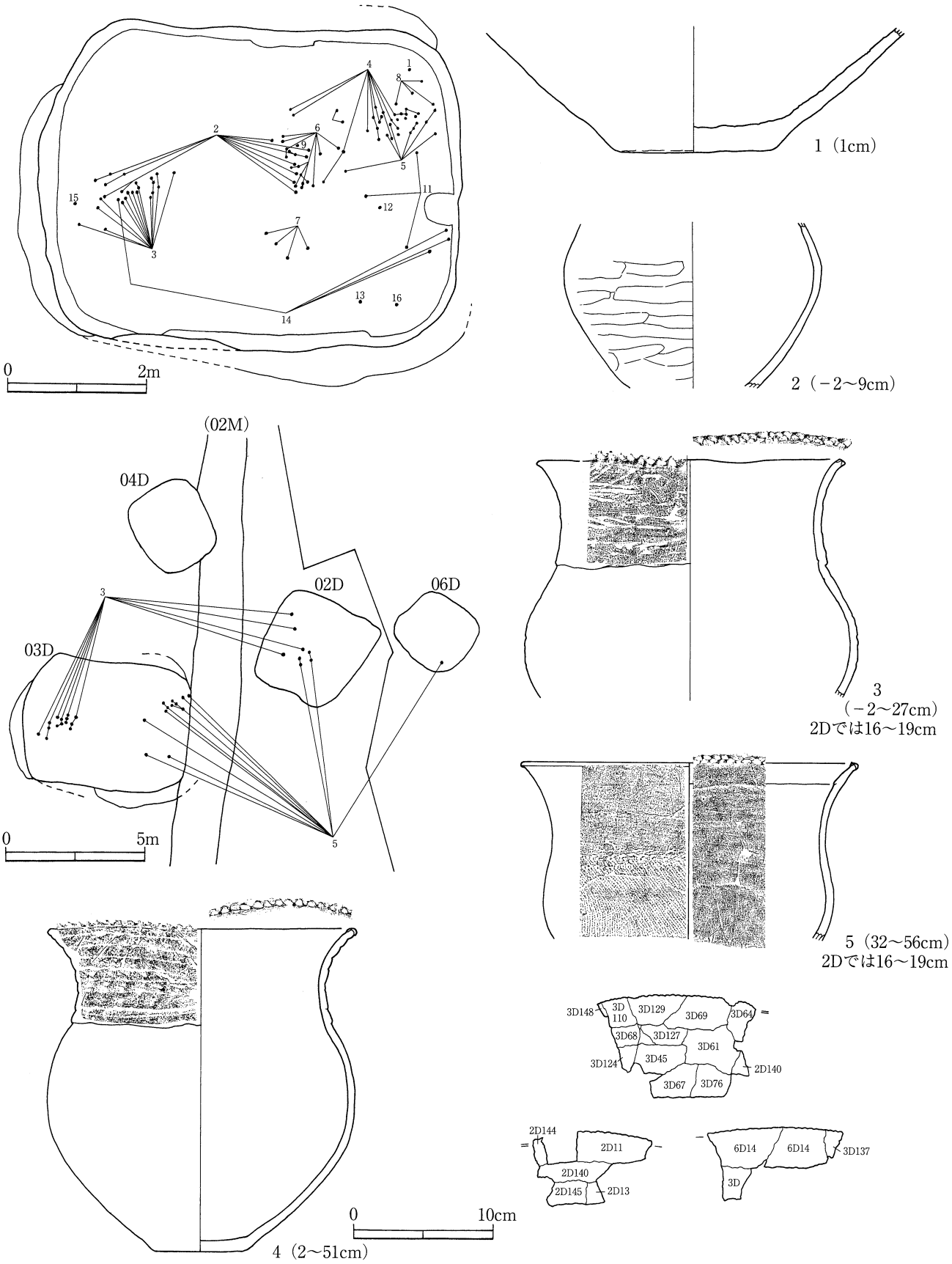
位置　Ｄ６－２Ｇを中心に検出。**主軸方位**　Ｎ -80° - Ｗで大きく西に傾く。**重複関係**　02 Ｍと東壁部分で重なる。02 Ｍに切られる。**平面形**　外側は浅い掘り込みで，住居本体の内側に沿うように周回する。東壁側は 02 Ｍにより，北壁側は確認調査時によって失われた。内側の住居本体は，東西に長い隅丸長方形である。**規模**　外側で 6.75m × 5.5m，内側の本体で 6.1m × 4.5m。**確認面**　新期テフラ層下の暗褐色土で深さは外側で 0.07 ～ 0.12m，内側で 0.8m ～ 0.87m と深い。**壁**　ほぼ直立ぎみに立ち上がる。**床**　ハードロームを 0.3m ～ 0.35m 掘り込んで地床としている。床面がハードロームということもあり，全体に締まるが，特定の硬化範囲は見られない。**周溝**　北壁と南壁の中央部分に幅 0.15m，深さ 5cm 程度の規模で部分的に見られる。**炉**　北壁中央から南西側に大きくカクランが入り込み，炉の大半を破壊している。そのため，部分的に遺存するのみである。遺存部分は長軸 0.35m 以上×短軸 0.35m で，深さ 8cm。やや小規模である。覆土は，黒褐色土で５～ 7㎜大の焼土ブロックを混入する。炉面はロームが赤色化し焼けている。**ピット**　P1 ～ P4 が主柱穴，P5 が出入口に伴う施設である。P1-P4 間の西側に小ピットが検出される。覆土も主柱穴上層の土層に近似することから，本遺構に伴うと考える。深さは 5cm 程度と浅い。P1 ～ P4 は，0.35m ～ 0.4m のほぼ円形で深さ 0.75m ～ 0.8m。P4 のみ 0.4m とやや浅い。覆土は，おおむね上層で黒色土・ローム混合の暗褐色土でややぼそぼそした層，下層でローム主に黒色土を含む褐色土である。P5 は 0.45m のほぼ円形で，深さ 0.12m。覆土は，黒色土・ローム混合の暗褐色土で炭化物をごく少量含みやや締まる土層である。**住居覆土**　確認面では，西側から中央やや東部分において黒色土が楕円形状に広がる。その東側と南壁・北壁側で，暗褐色土の最上位層が見られた。覆土は大きく，１～４層の自然埋没層の黒色土と５～９層の褐色土主体の層に分かれる。褐色土は土堤が人為的ないし自然営力により堆積したと考える。**遺物出土状態**　ほぼ住居四方の壁際上層～中層と中央部分の下層からの出土状況がみられる。層位的には，５～６層中と８層上である。3. 5 は，02D との異住居間接合であるが，両者とも覆土中の出土であり，本遺構ないし 02D 住居跡に伴う遺物ではない。



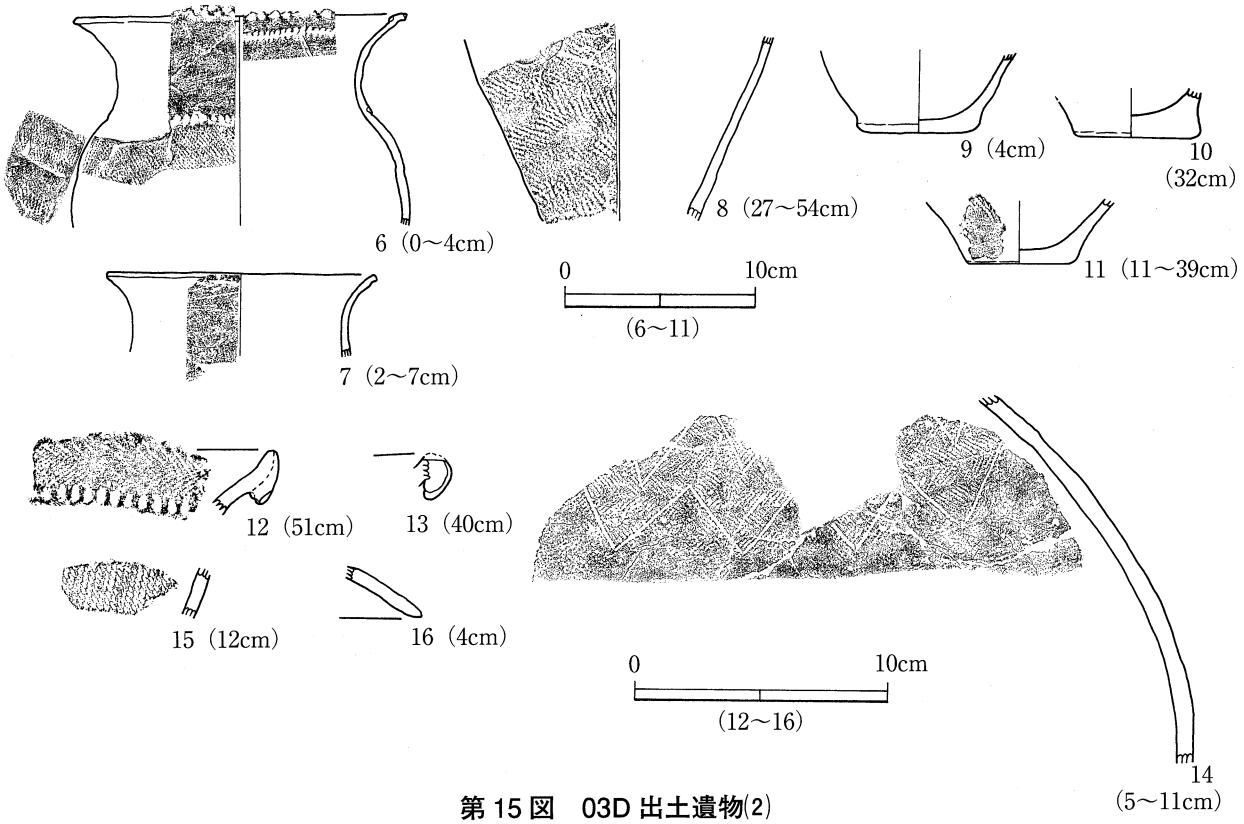
03D 土層説明

1.	黒褐色土	黒色土主にローム粒混入。粒子細かい。
2.	黒褐色土	黒色土，1～2㎜大ローム粒点在。しまる。
3.	黒褐色土	黒色土主にローム粒混入。2㎜大ローム粒全体に含む。しまる。
4.	暗褐色土	3層類似。ローム粒やや多い。
5.	褐色土	ローム，黒色土混合。2～3㎜大ローム粒混入。ややぼそぼそ。
6.	褐色土	ローム，黒色土混合。粘性有り。しまる。
7.	褐色土	ローム土主体。ややぼそぼそ。
8.	褐色土	ローム土主体。黒色土少量含む。しまる。
9.	暗褐色土	焼土粒，黒色土粒混合。炉下層の土。
10.	黒褐色土	ローム粒少量混入。しまる。02M ﾌｸ土。
11.	暗褐色土	ローム粒，黒色土混合，しまる。02M ﾌｸ土。

第 13 図　03D 遺構実測図



第 14 図　03D 出土遺物(1)



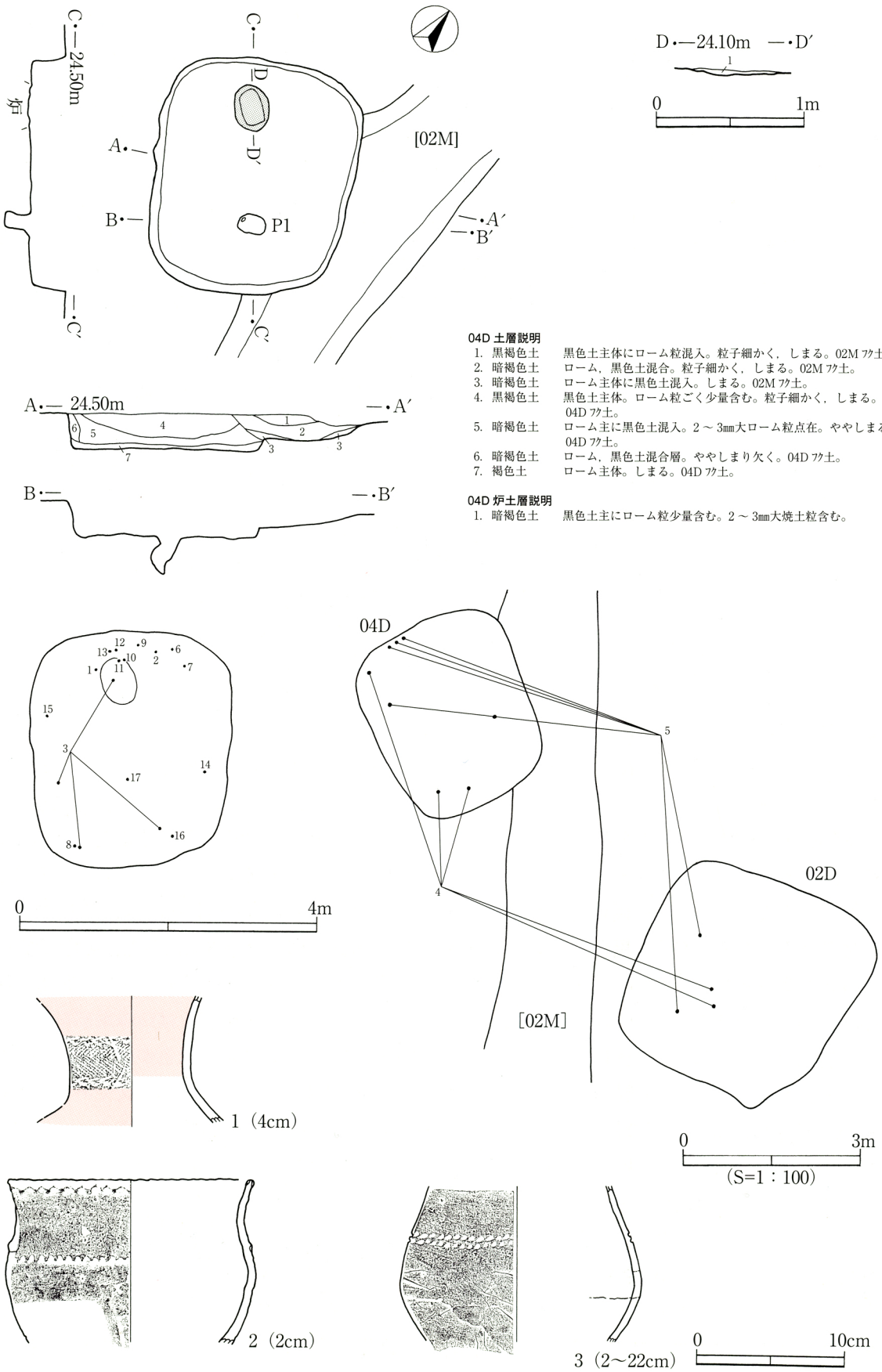
第15図　03D出土遺物(2)

０４Ｄ住居跡（第16．17図　図版6．12）

位置　Ｄ６－1.5Ｇを中心に検出。**主軸方位**　Ｎ-30°-Ｗでやや西に傾く。**重複関係**　02Ｍと東壁部分で重なる。02Ｍに切られる。**平面形**　南北にやや長い隅丸長方形である。**規模**　長軸3.2m×短軸2.75m。**確認面**　新期テフラ層下の暗褐色土である。深さは0.45m～0.47m。**壁**　ほぼ直立ぎみに立ち上がる。**床**　ハードロームを５～15cm掘り込んで地床としている。床面がハードロームということもあり，全体に締まるが，特定の硬化範囲は見られない。**炉**　長軸0.65m×短軸0.47mの楕円形で，3cm程度の掘り込みである。覆土は黒色土・ロームを少量含む暗褐色土で，２～3㎜大焼土粒を含んでいる。炉面はほぼ全体に赤色化したハードロームであり，よく使い込まれている。**ピット**　P1があり，0.4m×0.25mの楕円形で底面はやや西側に偏っている。深さは0.5mである。**住居覆土**　黒色土主に，住居壁側に暗褐色土がみられた。覆土は，４層の黒色土系の自然埋没土と，５・７層の褐色土系の堆積土に分かれる。５層は，ローム主体の層に黒色土を混入しており，自然埋没土か。**遺物出土状態**　炉に近い北壁際上層～下層と南壁側上層に分布する。層位的には，４層下位・５層中位・７層中である。ほぼ本遺構に伴う遺物は，**1．2．6**は確実と考えられる。なお，**4．5**は異住居間接合であるが，両者とも覆土中の出土であり，両住居跡に伴うものではない。

１０Ｐピット（第18図　図版9.13）

位置　Ｅ５－６Ｇを中心に検出。**重複関係**　02Ｍ溝状遺構と重なる。02Ｍに切られる。**長軸**　Ｎ-30°-Ｗでやや西に傾く。**平面形**　隅がやや丸い長方形。**壁・底面**　遺構確認面が02Ｍ下にあり，掘りこみは極めて浅い。壁はほぼ直立に立ち上がっていたと想定されるが，02Ｍにより壁面が失われたために明確ではない。底面についてはほぼ平坦であるが，南側部分でやや凹凸がみられる。02Ｍの影響である。



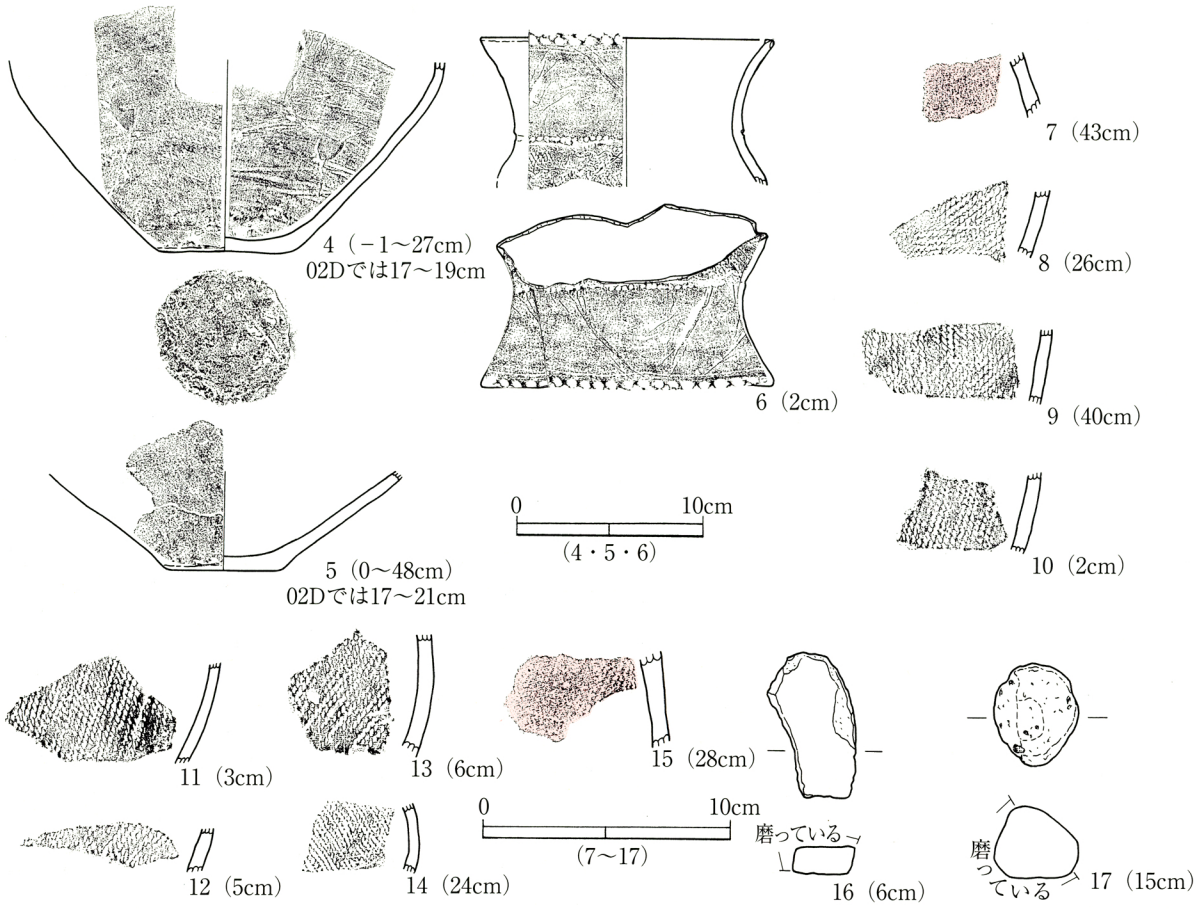
04D 土層説明

1. 黒褐色土　黒色土主体にローム粒混入。粒子細かく，しまる。02M ﾌｸ土。
2. 暗褐色土　ローム，黒色土混合。粒子細かく，しまる。02M ﾌｸ土。
3. 暗褐色土　ローム主体に黒色土混入。しまる。02M ﾌｸ土。
4. 黒褐色土　黒色土主体。ローム粒ごく少量含む。粒子細かく，しまる。04D ﾌｸ土。
5. 暗褐色土　ローム主に黒色土混入。2～3㎜大ローム粒点在。ややしまる。04D ﾌｸ土。
6. 暗褐色土　ローム，黒色土混合層。ややしまり欠く。04D ﾌｸ土。
7. 褐色土　ローム主体。しまる。04D ﾌｸ土。

04D 炉土層説明

1. 暗褐色土　黒色土主にローム粒少量含む。2～3㎜大焼土粒含む。

第 16 図　04D 遺構実測図・出土遺物(1)



第17図　04D 出土遺物(2)

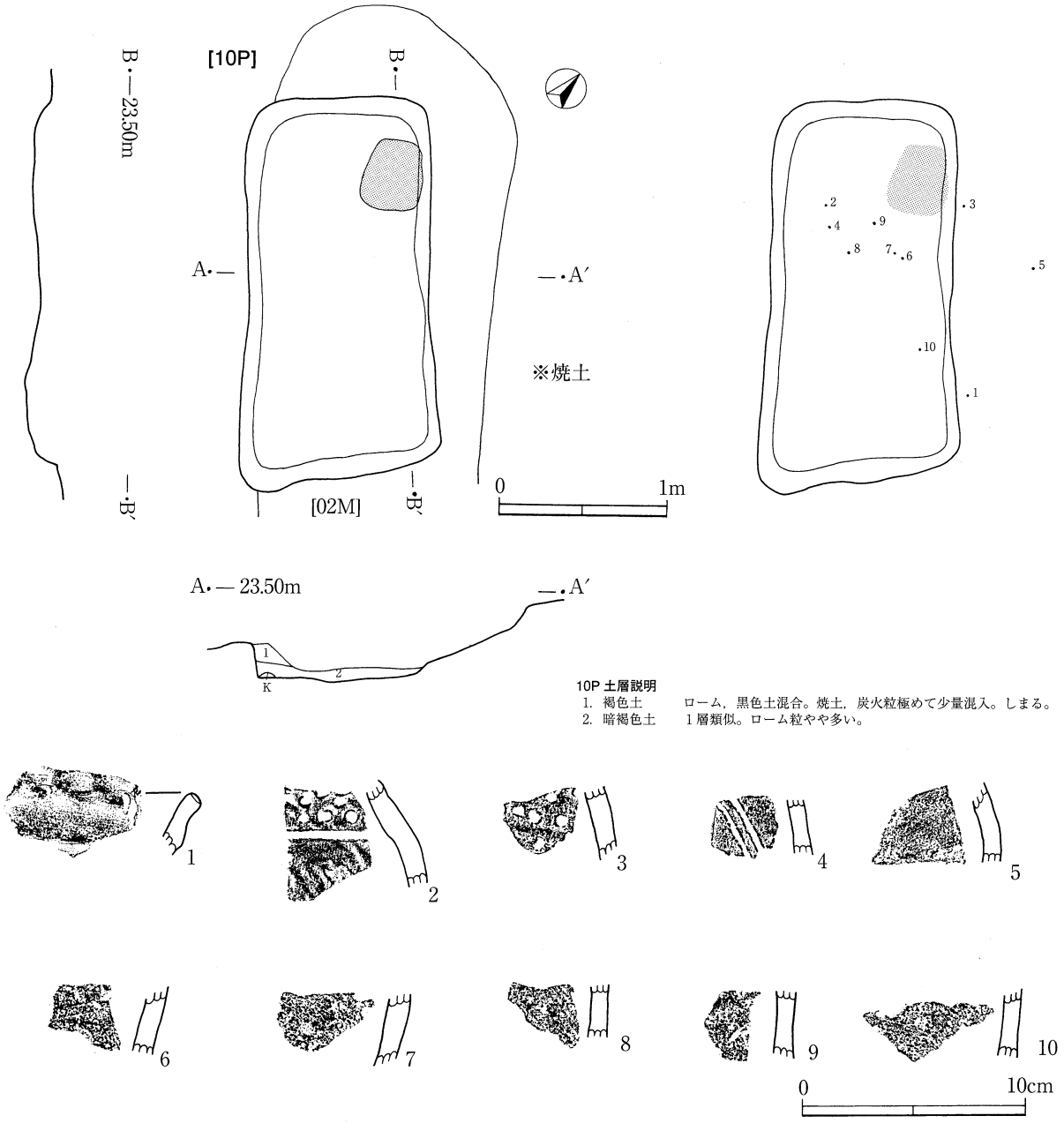
規模　確認面は新期テフラ層下の暗褐色土で，長軸 2.28m ×短軸 1.08 m，深さ 0.22m である。**覆土**　ローム・黒色土混合の暗褐色土で，1. 2 層に分層される。上下層とも焼土粒をごく少量混入する。1 層中において焼土集中部分が，0.45m × 0.35m の範囲で検出された。厚さは 8cm 程度である。底面からやや浮いた状態である。覆土全体に焼土が混入していることから，自然埋没ではないと想定されよう。**遺物**　弥生時代中期の土器片が 11 点出土した。02 Mにより原位置が動かされたものも含むが，底面から 10 ～ 30cm 浮いた状態で出土している。分布範囲は中央やや北寄りである。図中 **1** は口縁端部を平坦に面どりした波状口縁である。胎土は以下の遺物全てが白色粒と砂粒を含み，やや灰色がかった暗褐色である。**2 ～ 10** は胴部上～下半部で，2. 3. 4 には円形竹管，沈線がみられる。5 以下は無文である。**所見**　本遺構は，平面形態・覆土の状態・出土遺物から，弥生時代中期の土坑墓に想定されよう。

第４節　ピット・溝状遺構

今回の調査において，時期特定のむずかしいピット 8 基，溝状遺構 2 条を検出した。11P を除き，確認面が新期テフラ層上層ないしその下層の暗褐色土層上面であり，弥生時代更には奈良・平安時代に下る時期の遺構と考えている。

０１Ｐピット（第 19 図　図版 9）

位置　Ｅ４－11 Ｇを中心に検出。**重複関係**　01 M溝状遺構と重なる。01 Mを切る。**長軸**　なし。**平面**



第 18 図　10P 遺構実測図・出土遺物

形　ほぼ円形。**壁・底面**　すり鉢状の断面で，底面はやや北東に偏り，平坦な部分はみられない。壁は角度をもって立ち上がっているが，直立を全く意識していない。**規模**　確認面は新期テフラ層中で，0.93m の円形，深さ 0.58m である。**覆土**　上層がローム・黒色土混合の黒褐色土で，下層がローム主体の褐色土に分層される。**遺物**　なし。**所見**　01 Mをきる。

０３Ｐピット（第 19 図　図版 9.13）

位置　Ｂ５－12 Ｇを中心に検出。**重複関係**　単独。**長軸**　Ｎ -32° - Ｗでやや西に傾く。**平面形**　ややいびつな楕円形。**壁・底面**　壁は北側で緩やかに立ち上がり，南側で直立している。底面は楕円形に平坦面をつくる。**規模**　確認面はテフラ層下の暗褐色土中で，長軸 1.02m ×短軸 0.72 mの楕円形，深さ 0.22m である。**覆土**　上層が黒色土主体の暗褐色土で，下層がローム主体の褐色土に分層される。**遺**

物　1は附加条縄文を施文する土器片である。**所見**　弥生時代後期の貯蔵用施設か。

０４Ｐピット（第19図　図版9.13）

位置　Ｅ６－10Ｇを中心に検出。**重複関係**　単独。**長軸**　Ｎ-60°－Ｗで西に傾く。**平面形**　ややいびつな楕円形。**壁・底面**　壁は全体に直立気味に立ち上がっている。底面は楕円形に平坦で，ハードロームを5cm程度掘り込んで坑底としている。**規模**　確認面はテフラ層下の暗褐色土中で，長軸1.92m×短軸1.32ｍの楕円形，深さ0.38mである。**覆土**　ローム・黒色土混合の暗褐色土で，全体に締まりを欠く層が主体を占める。**遺物**　小片のため，判然としないが附加条縄文を施文する弥生土器片か。**所見**　覆土の状態から埋め戻しが行われた土坑である。

０５Ｐピット（第19図　図版9）

位置　Ｅ６－11Ｇを中心に検出。**重複関係**　単独。**長軸**　Ｎ-90°－Ｗでほぼ真西に傾く。**平面形**　ややいびつな円形。**壁・底面**　壁は西側でやや直立気味に立ち上がり，他は角度はあるが，やや緩やかに立ち上がっている。底面は楕円形に平坦面をつくるが，壁立ち上がりは明瞭ではない。**規模**　確認面はテフラ層下の暗褐色土中で，長軸1.48m×短軸1.26ｍの円形，深さ0.29mでソフトローム中の掘りこみである。**覆土**　上層が黒色土主体で炭化物を含む層，底面近くに粉状の炭が1.0m×0.78m，厚さ6cmの範囲でみられた。最下層はローム主体の褐色土である。**遺物**　出土しなかった。**所見**　遺物がないため時期の特定はできないが，炭化物の混入等人為的埋め戻しが想定され，土坑墓の可能性も考慮されよう。

０６Ｐピット（第20図　図版9）

位置　Ｅ６－12Ｇを中心に検出。**重複関係**　単独。**長軸**　Ｎ-22°－Ｗでやや西に傾く。**平面形**　楕円形。**壁・底面**　壁は南北で緩やかに立ち上がっている。底面は壁立ち上がり部分が不明瞭で，明確な平坦面は見られない。ハードロームを5cm程度掘り込んで坑底としている。**規模**　確認面はテフラ層下の暗褐色土中で，長軸1.58m×短軸1.06ｍ，深さ0.38mである。**覆土**　ローム・黒色土混合の暗褐色土が主体を占める。**遺物**　出土しなかった。**所見**　性格は不明である。

０７Ｐピット（第20図　図版9）

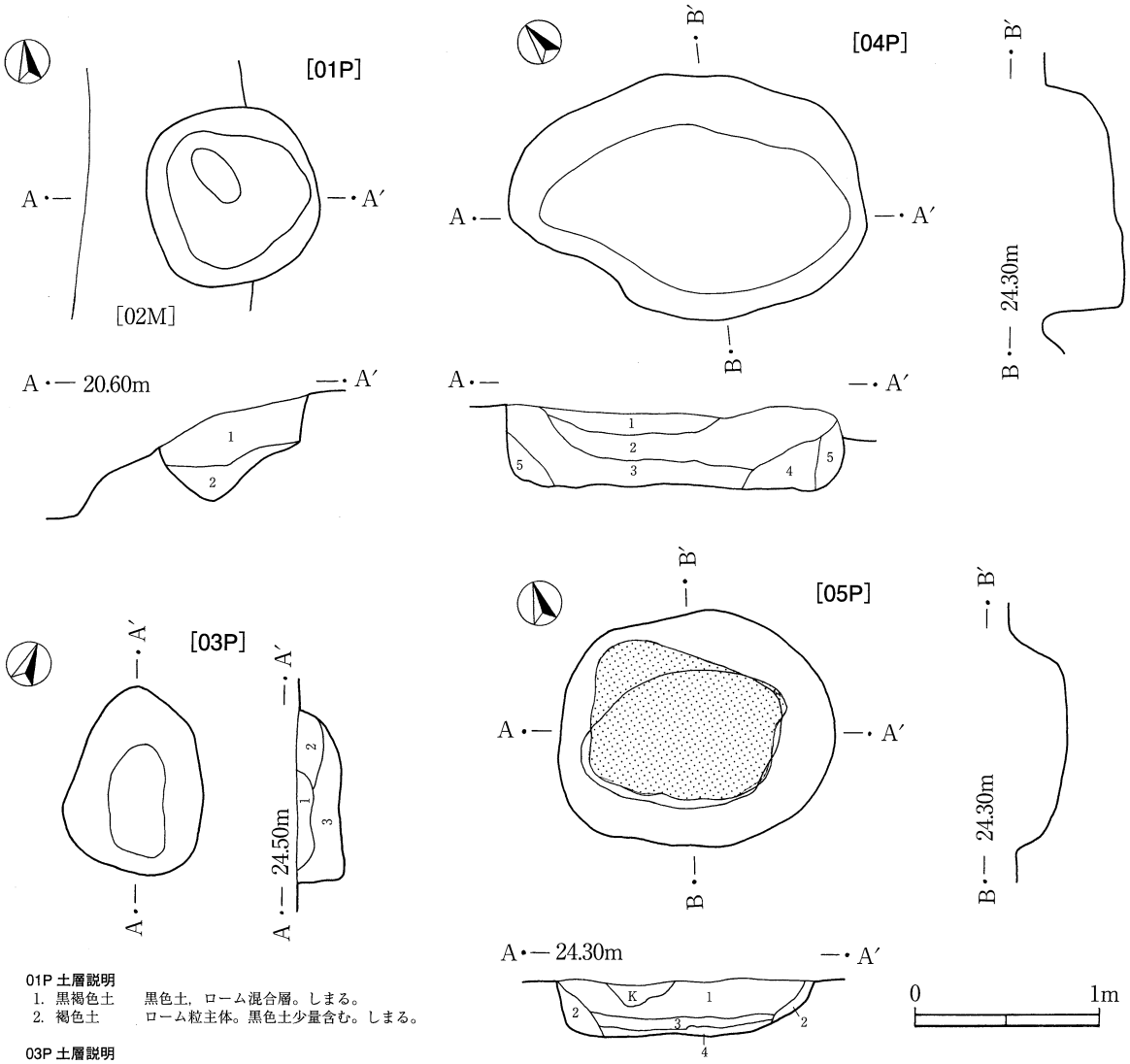
位置　Ｅ５－15Ｇを中心に検出。**重複関係**　単独。**長軸**　Ｎ-60°－Ｗで西に傾く。**平面形**　楕円形。**壁・底面**　壁は全体に直立気味に立ち上がっている。底面は全体に平坦である。ハードロームを5cm程度掘り込んで坑底としている。**規模**　確認面はソフトローム上面で，長軸2.22m×短軸1.12ｍ，深さ0.36mである。**覆土**　ローム・黒色土混合の暗褐色土で，ロームブロックを含む層が主体を占める。**遺物**　出土しなかった。**所見**　性格は不明である。

０８Ｐピット（第20図　図版9）

位置　Ｆ５－９Ｇを中心に検出。**重複関係**　単独。**長軸**　Ｎ-24°－Ｅでやや東に傾く。**平面形**　楕円形。**壁・底面**　壁は全体に直立気味に立ち上がっている。底面は全体に平坦である。ソフトローム上面を坑底としている。**規模**　確認面は暗褐色土中で，長軸1.54m×短軸1.09ｍ，深さ0.26mである。**覆土**　暗褐色土。**遺物**　出土しなかった。**所見**　性格は不明である。

１１Ｐピット（第20図　図版13）

位置　Ｃ５－15Ｇを中心に検出。**重複関係**　単独。**長軸**　なし。**平面形**　ほぼ円形。**壁・底面**　壁は直立気味に角度をもって立ち上がっている。底面は平坦である。**規模**　確認面はソフトローム上面で，0.82mの円形，深さ0.34mである。**覆土**　上層がローム・黒色土混合の黒色土ないし暗褐色土で，下層がローム主体の褐色土に分層される。2．3層に炭化物・焼土粒が点在している。**遺物**　弥生土器小片が出土した。**所見**　全体に締まった覆土で炭化物等の混入があり，人工的所産である。



01P 土層説明
1. 黒褐色土　黒色土，ローム混合層。しまる。
2. 褐色土　ローム粒主体。黒色土少量含む。しまる。

03P 土層説明
1. 暗褐色土　黒色土主にローム粒混入。粘性強くしまる。
2. 暗褐色土　1層に類似。黒色土少ない。
3. 褐色土　ローム土主体。黒色土少量含む。しまる。

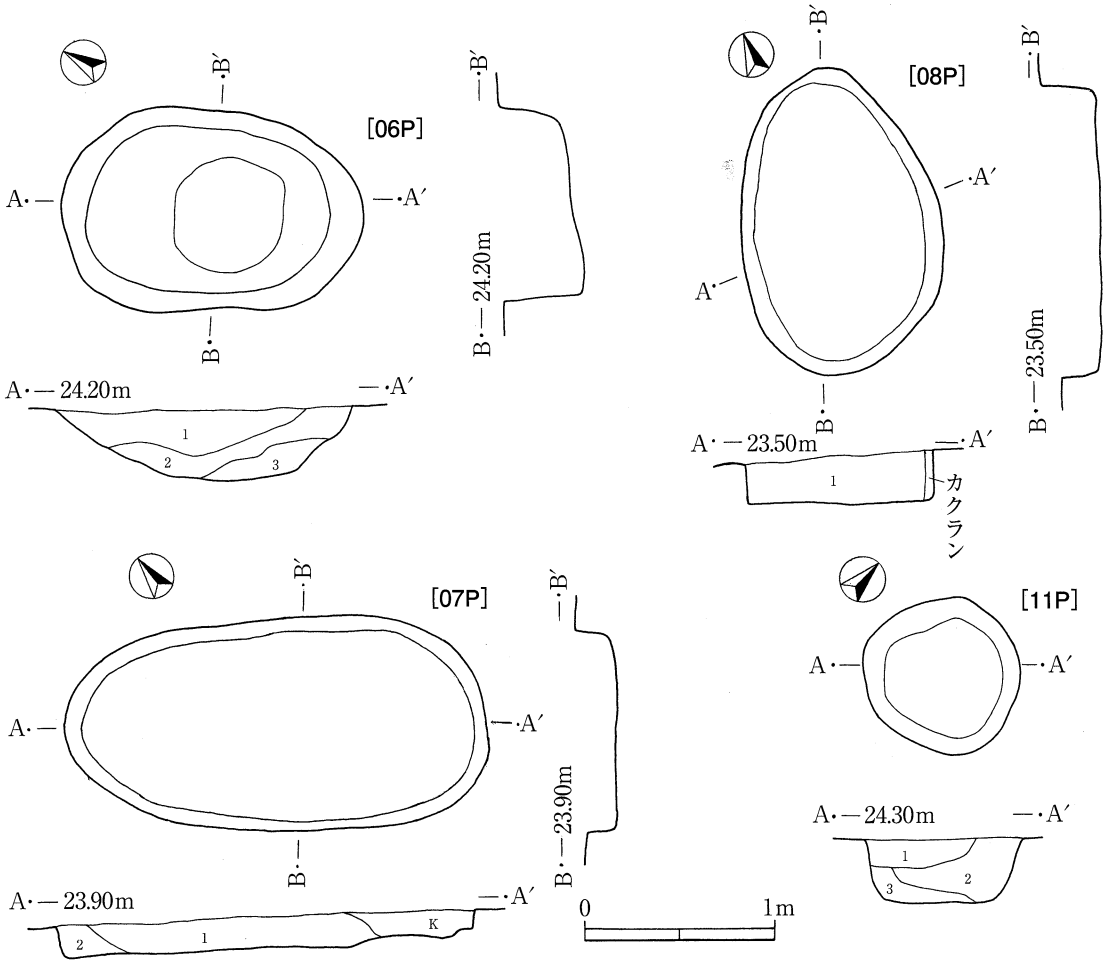
04P 土層説明
1. 黒褐色土　ローム粒少量含む。ややしまり欠く。
2. 暗褐色土　ローム，黒色土混合層。ややしまり欠く。
3. 暗褐色土　2層に類似。黒色土やや多い。
4. 暗褐色土　2層に類似。ロームやや多い。
5. 褐色土　ローム土主体。

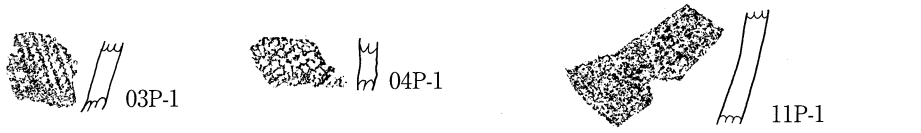
05P 土層説明
1. 暗褐色土　黒色土主体。2～3㎜大ローム粒。炭化物混入。
2. 褐色土　ローム土主体。黒色土少量含む。ややしまる。
3. 黒褐色土　粉状炭。
4. 褐色土　ローム土主体。3層より黒色土少ない。ややしまる。

第19図　01・03・04・05P 遺構実測図

０１Ｍ溝状遺構（第21図　図版7.13）

位置　C4. D4. E4区を南北に縦断する。**重複関係**　01 Pに切られる。**長軸**　座標上の南北方向。全長65m以上で調査区外に延びる。**規模**　上面幅2.1m～2.5m　下面幅0.75m～1.0m　断面は逆台形状であるが，東壁側はやや緩く，西壁側は角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。**確認面**　新期テフラ層中～暗褐色土層中である。深さは0.45m～0.55m。底面の標高は，北側のA-A’で22.1m，中央のC-C’で20.7m，南側のE-E’で19.9mと北から南へ下がる。**覆土**　黒色土，暗褐色土系の自然埋没層である。**遺物**　全体で16点程度と少ない。南側のE-E’付近で7点出土した。**1.2**は弥生土器小片で，1は無文の胴部片で胎土は長石細片，石英を含む。2は附加条縄文？　を施文する。**3**は砥石で，石材は砂岩である。長辺6.1cm，短辺2.1cm，重量32.0gで四面において磨られる。





06P 土層説明
1. 暗褐色土　黒色土，ローム混合層。ややしまる。
2. 暗褐色土　1層に類似。ローム粒多い。
3. 褐色土　ローム土，ロームブロック混入。ややしまる。

07P 土層説明
1. 暗褐色土　黒色土，ローム混合。2cm 大ロームブロック混入。
2. 褐色土　ローム土，黒色土少量含む。

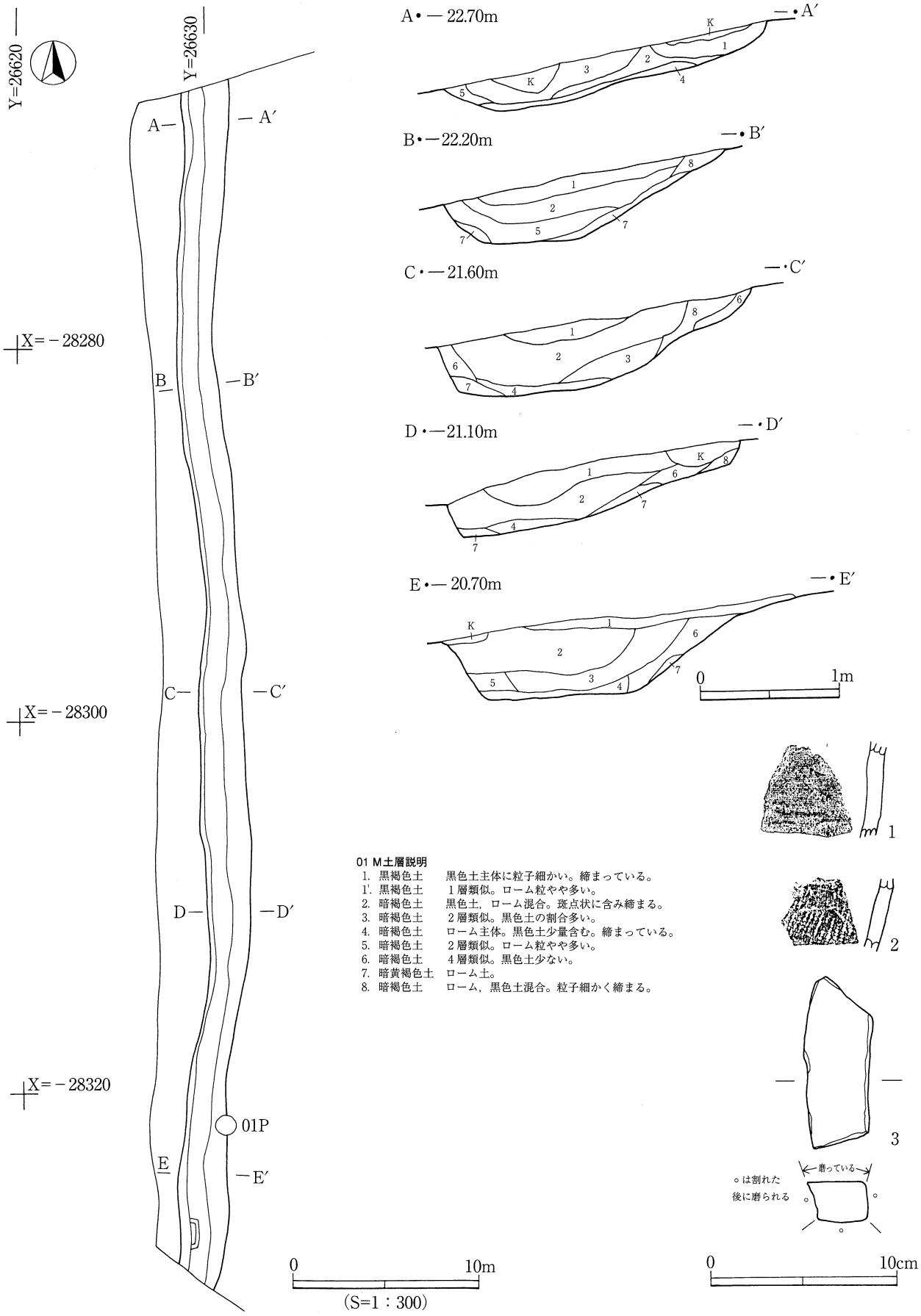
08P 土層説明
1. 暗褐色土

11P 土層説明
1. 暗褐色土　ローム，黒色土混合。ややしまる。
2. 黒褐色土　炭火粒混入。焼土粒，ローム粒点在。
3. 褐色土　ローム主体。暗褐色土混入。焼土粒，炭化粒混入。

第 20 図　06・07・08・11P 遺構実測図・出土遺物

０２Ｍ溝状遺構（第 22 図　図版 8.13）

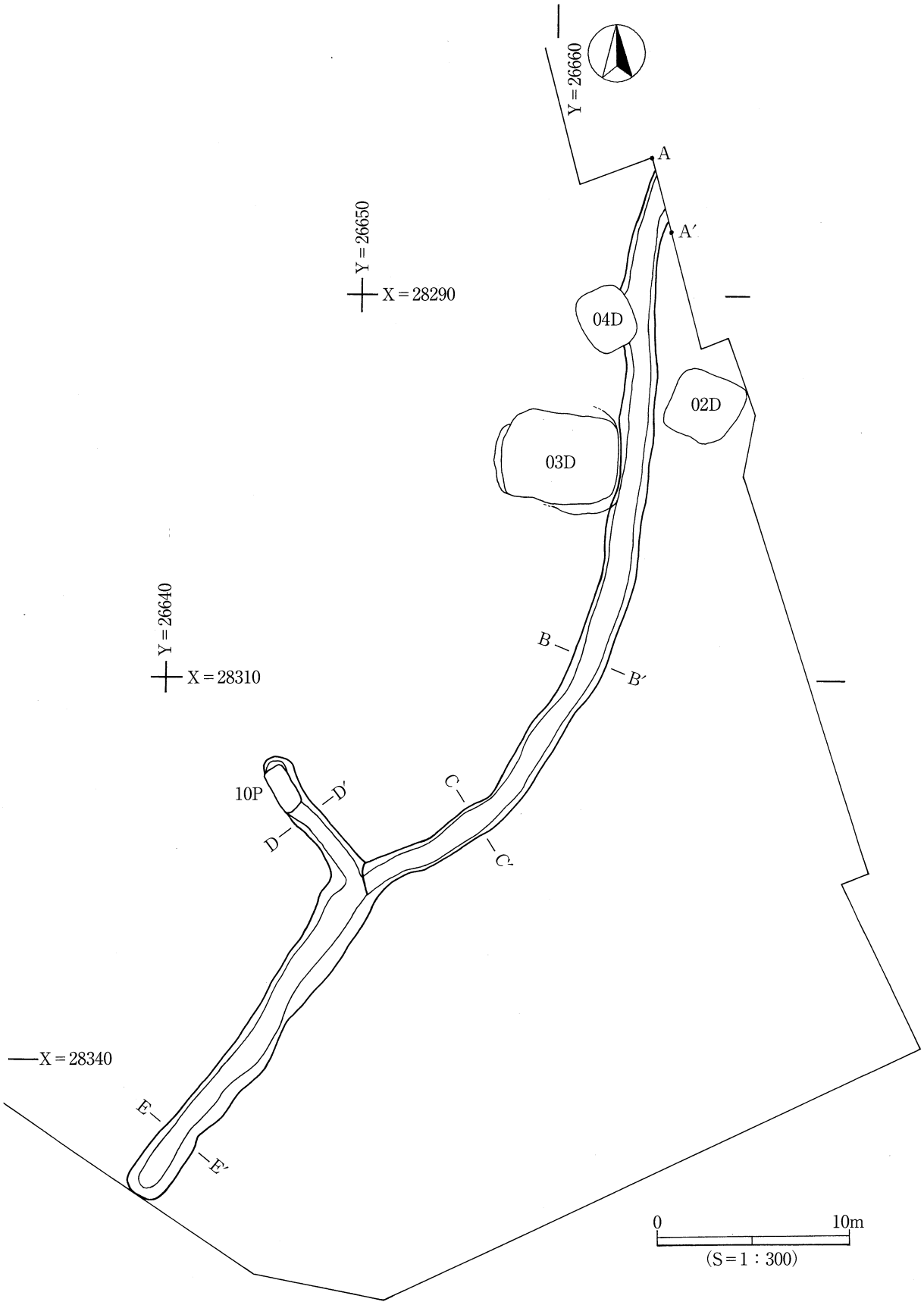
位置　C6. D6. E5. F5 区を北東方向に縦断する。**重複関係**　03D. 04D. 10P を切る。**長軸**　やや蛇行するが，N -40° - E に向く。全長 60m 以上で北側に延びる。南側では，立ち上がっている。この溝は当初セクション D-E 間で L 字状に遺存していたところに，セクション A-B-C 間が結合した結果，最終的にこの形状になったと想定される。C-D 間において，その結合部分が観察できる。**規模**　上面幅 1.6m　下面幅 0.85m　断面は壁の立ち上がりが不明瞭な幅広の U 字状である。**確認面**　暗褐色土層中で深さは 0.4m。**覆土**　黒色土，暗褐色土系の自然埋没層である。**遺物**　全体で 34 点程度。中央の B-B' 付



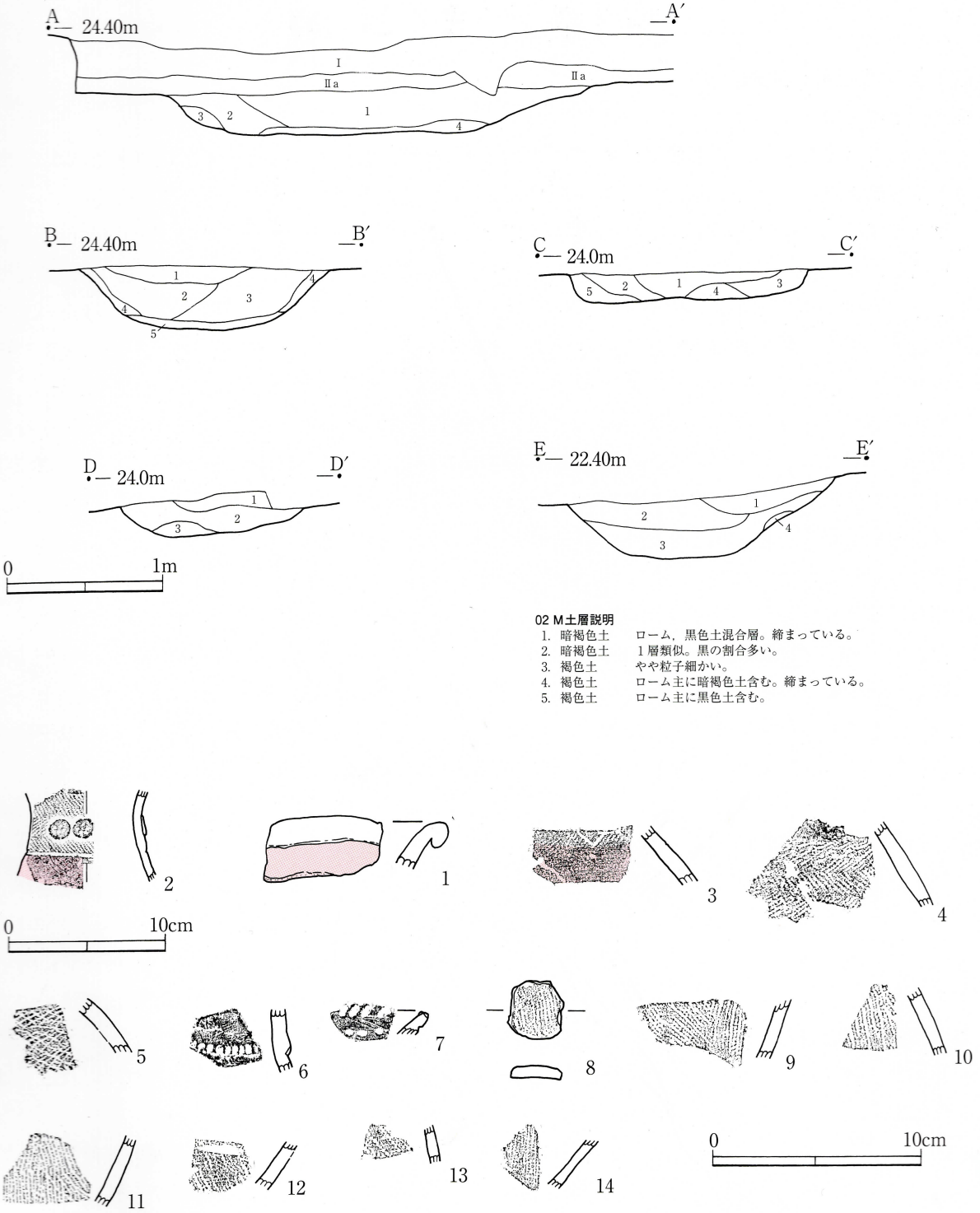
01 M土層説明

1. 黒褐色土　黒色土主体に粒子細かい。締まっている。
1'. 黒褐色土　1層類似。ローム粒やや多い。
2. 暗褐色土　黒色土，ローム混合。斑点状に含み締まる。
3. 暗褐色土　2層類似。黒色土の割合多い。
4. 暗褐色土　ローム主体。黒色土少量含む。締まっている。
5. 暗褐色土　2層類似。ローム粒やや多い。
6. 暗褐色土　4層類似。黒色土少ない。
7. 暗黄褐色土　ローム土。
8. 暗褐色土　ローム，黒色土混合。粒子細かく締まる。

第21図　01M遺構実測図・出土遺物



第 22 図　02M 遺構実測図



02 M土層説明

1.	暗褐色土	ローム，黒色土混合層。締まっている。
2.	暗褐色土	1層類似。黒の割合多い。
3.	褐色土	やや粒子細かい。
4.	褐色土	ローム主に暗褐色土含む。締まっている。
5.	褐色土	ローム主に黒色土含む。

第23図　02M土層断面図・出土遺物

近に多く出土する。更に北側での出土が少量みられる。全体に覆土中出土であり，混入したものである。**1～5**は南関東系の装飾壺口縁部～頸部～胴部である。1は折返し口縁，2は沈線区画内に羽状縄文，円形浮文を貼付ける。3は山形沈線文内外に縄文施文，4はS字状結節文下に羽状縄文で3.4とも胎土は，赤色スコリヤ・黒色粒・石英を混入する。5は網目状撚糸文施文で，内面を赤彩する。**6**は輪積み甕胴部の刻み目部分である。**8**は円盤状土製品で，2.5cmの円形，重量4.9gである。**9～14**は附加条縄文施文の胴部片を一括した。胎土は長石細片・石英を多く含む。

第3章　まとめ

第1節　縄文時代の様相

縄文式土器について

出土総数は159点で，時期的には縄文早期中葉から後期中葉に及ぶ。その中では称名寺式土器が89点と最も出土量が多く，ａ地点でも15点出土しており，今回と合わせれば104点を数える。

称名寺式期は，本遺跡における縄文時代人の活動の痕跡が，最も顕著に認められる時期と言えよう。

型式学的な細分に関して，少しく触れてみたい。口縁部を有する資料のうち，第7図15は無文帯を有さない属性から，Ｉｂ式（旧7段階区分の第3段階）に比定できる。同図16・17は，Ｉｃ式（旧7段階区分の第4段階）に比定できよう。胴部片は描線が太く，かつ施文のタイミングが早い第7図18がＩｂ式で，同図19～29はＩｃ式に比定したい。同図17・23はａ地点で同一個体が出土した。

第7図30～32は条線文系，同図34は無文系の粗製土器であって，これらはⅡ式に比定されるものである。ただし，旧7段階区分で見た場合は、精製土器が出土していないため，判断し難い。ちなみに，ａ地点では，称名寺Ⅱ式土器は1点も出土しなかった。同図33は縄文系の粗製土器である。

堀之内式土器のうち,「堀之内2式土器」は確実なもので5点を数えた。少量であるが,八千代市域では,今後とも記憶に留めておくべき資料群と言える。なぜならば，村上台の場合、著名な神野貝塚では比較的容易に採集できるが，その他の遺跡では，これだけ発掘調査が行われ，数多の縄文式土器が出土しているにも拘らず，ほとんど見られないからである。ちなみに，ａ地点では「堀之内1式土器の終末段階」の資料が出土している。今回の資料の細分結果如何では，時期的に断絶が認められるかも知れない。

以上のささやかな資料群から，平沢小支台における，西谷津に面した台地北西側縁辺部の土地利用が，後期初頭～前葉では断絶を挟みながらも，比較的頻繁であったことを指摘しておく。

第2節　弥生時代の様相

土坑1基と竪穴住居跡4軒が検出された。

10 Pは,遺物から中期中葉に位置付けられる墓坑ないし1次埋葬坑と想定した。ただ,単独での検出・焼土を伴う点等遺構としての認定には，精査が必要と思われる。また出土遺物は，19ページに図示したように面どりした波状口縁・沈線・円形竹管・半截竹管による細沈線と無文胴部で，消去法の中での選択では須和田式の新しい段階であろうか。これについても同様に精査が望まれよう。

竪穴住居跡は01D・02D・03D・04Dが，後期後葉段階の髙花編年Ⅲ期前後に位置づけられる。以下各住居跡の遺物について触れていきたい。

01 Dは1～7が住居廃絶時の解体前の遺物に想定される（第9図）。**1**は南関東系の装飾壺で，結節文区画内に羽状縄文を施文する。**2**は頸部までに6段の輪積痕と無文下に附加条縄文を施文する。結節文区画は見られない。また,**2**及び**4**の口縁部内面の特徴として,浅い稜が見られる点が指摘される。1,2の要素からⅢ期でもやや古い段階か。

02 Dはほぼ全てが床面から浮いた状態の覆土中出土であり，住居解体後の直上層出土の遺物及び自然埋没段階の他からの廃棄遺物である。遺物にはある程度の時間差が想定される（第11．12図）。**1**は南関東系の装飾壺頸部で，下半に網目状撚糸文を施文する。**2**は結節文下に異種原体縄文を施文する壺胴部である。**3**は肩部に円形竹管を施文した段を有する甕で，粗いハケ工具によるナデ調整がみられる。**5・6**は輪積痕が口縁部周辺にみられる。無文下の施文は不明である。**12**は緩い段の複合口縁で，やや退化した形態である。**22**～**36**は，異種原体，附加条縄文等バラエティがみられる。以上の要素から，

住居廃絶時はⅢ期の古い段階，自然埋没時はⅢ期の新しい段階が想定される。

03 Dは1・2・6・7・9・14が住居廃絶時に近い遺物で，4・8が住居解体後直後の廃棄遺物，3・5は他からの廃棄遺物である（第14・15図）。**1・2・6・7・14**は南関東系の遺物で，6は波状口縁で胴部単節斜縄文・刻み目文を口縁内面直下に配し，段を有する形態である。**3・4**は，形態がほぼ同一で，胎土から4が原型で，3が当地での模倣である。**5**は胴部施文が，結節文下に附加条縄文である。また口縁部内面に浅い稜が見られる。以上の要素から，結節文＋附加条縄文のⅢ期よりも，ややⅡ期に近い時期が想定される。

04 Dは1・2・6が住居廃絶時の遺物で，3が住居解体後直後の廃棄遺物，4・5が他からの廃棄遺物である（第16・17図）。**1**は南関東系の壺頸部で，結節文区画内に羽状縄文を施文する。**2・3**ともに胴部上位に刻み目文ないし刺突文を施文し，全体にナデ調整される。**6**は波状口縁＋円形竹管文下に結節文＋附加条縄文施文である。**8～14**は附加条縄文を施文する胴部片である。以上の要素から，結節文＋附加条縄文のⅢ期に想定される。

以上各住居跡の時期について述べたが，01 D～04 Dについての遺物構成は，全体に南関東系遺物が多い傾向である。結節文＋附加条縄文施文も基本的だが，波状口縁・口縁部内面の緩い段について併せ持つことは，両者の融合と想定したい。更に，本遺跡では，在地産の複合口縁形態の甕はほとんど出土していない。この点は他の遺跡との比較で注目すべきことである。それが時期差であるのか，その遺跡の文化受容の違いであるのかは，筆者にはむずかしい。

また，異住居間接合が5点みられたことは，住居廃絶や遺物廃棄を考える上で重要である。

［参考文献］

髙花宏行 1999「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の土器の変遷について」『なわ』第37号　奈和同人会

2007〔「臼井南式」と周辺土器様相の検討〕『研究紀要5』 財団法人印旛郡市文化財センター

01D 住居跡遺物観察表

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第9図1	装飾壺		最大径〔30.0〕	〔15.4〕	頸部～胴上半	細砂，長石，石英，雲母ごく少量。	内外面赤褐色	刺突円形浮文下に羽状縄文　無文帯　結節文区画内に羽状縄文施文 内面赤彩
第9図2	甕	23.4	最大径 25.8	〔23.0〕	口縁～胴下半	長石細片，小石粒，黒色粒	内外面黒褐色～淡橙褐色	単口縁。口唇上に縄文施文　6段の輪積み痕　無文帯　附加条縄文施文 内面やや内側に浅い稜　全体にナデ　胴下半にコゲ痕跡
第9図3	甕				口縁部	石英，長石細片，黒色粒	内外面橙褐色	工具押圧による波状口縁直下に縄文原体押圧 内面ナデ
第9図4	甕				口縁部	長石細片，赤色スコリア	内外面黒灰褐色	単口縁。外面ナデ　内面口唇やや下に稜と円形刺突文　ナデ
第9図5	壷				胴部片	石英，小石粒	外面淡褐色 内面橙褐色	内外面ナデ
第9図6	土製品				胴部	石英，小石粒	内外面橙褐色	内外面ナデ　打欠き整形　3.8cm × 3.6cm　11.4g　刻み目1ヵ所
第9図7	甕				胴部	長石細片，石英，小石粒	外面淡褐色 内面黒色	単節斜縄文　内面コゲ痕跡
第9図8	甕				胴部	長石細片，石英，小石粒	外面黒灰褐色 内面淡橙色	単節斜縄文　外面煤
第9図9	甕				胴部	石英，小石粒，黒色粒	内外面淡褐色	外面C字状の刺突文
第9図10	甕				胴部	石英，小石粒	内外面淡茶褐色	半截竹管の沈線　刺突文

02D 住居跡遺物観察表

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第 11 図 1	装飾壺		頸部径〔16.0〕	〔9.7〕	頸部	石英，黒色粒，小石粒	橙褐色	外面縦位ヘラミガキ（赤彩）　下位網目状撚糸文 内面ミガキ　赤彩
第 11 図 2	装飾壺		最大径〔17.4〕	〔11.2〕	胴部	石英，長石，赤色ｽｺﾘｱ	内外面橙褐色	外面ミガキ（赤彩）　結節文下羽状縄文　結節文下単節縄文　ミガキ（赤彩）　内面ナデ
第 11 図 3	甕	最大径 23.1	7.3	〔15.3〕	胴中位～底部	長石細片，赤色ｽｺﾘｱ	内外面暗褐色	外面円形刺突伴う肩部下段の輪積み痕　全体に木口状工具ナデ 内面ナデ　　外面最大径上下に煤
第 11 図 4	装飾壺		最大径〔32.6〕	〔12.1〕	胴上半	石英・長石多含，赤色スコリア，黒色粒	内外面暗褐色	外面山形沈線文区画内に縄文施文　下部は赤彩　胴部中央煤 内面ナデ
第 11 図 5	甕	24.6		〔8.1〕	口縁部	長石細片，石英	内外面淡橙褐色	外面単口縁　口唇部縄文施文　３段輪積み痕　ナデ 内面ナデ
第 11 図 6	甕	18.4		〔9.8〕	口縁部	石英・長石多含，小石粒	内外面淡茶褐色	外面単口縁　５段輪積み痕　ナデ 内面ナデ
第 11 図 7	甕	最大径〔16.6〕	7.6	〔7.8〕	胴下半～底部	石英多含，長石	内外面橙褐色	外面附加縄文 内面ナデ
第 11 図 8	甕				底部	長石細片	内外面淡橙褐色	外面木葉痕 内面ナデ
第 11 図 9	甕	最大径〔7.4〕	4.6	〔2.7〕	底部	石英，長石	内外面淡茶褐色	外面ナデ 内面ナデ
第 11 図 10	甕	最大径〔12.4〕	7.4	〔4.5〕	底部	石英，長石，砂粒少量	内外面橙褐色	外面附加条縄文 内面ナデ　底部内面コゲ
第 11 図 11	装飾壺				口縁部	黒色粒多含，石英小石粒	内外面淡橙褐色	外面折返し口縁部羽状縄文　下部刻み目
第 11 図 12	甕				口縁部	長石細片，石英	内外面淡褐色	外面刻みによる波状口縁　緩い輪積み痕跡　煤付着 内面ナデ
第 11 図 13	装飾壺				口縁部	石英，長石，小石粒	内外面橙褐色	外面折返し口縁　直下赤彩 内面ミガキ
第 11 図 14	甕				胴部	長石細片，石英	内外面暗褐色	肩部有段で輪積み　押圧による刻み目
第 11 図 16	小型鉢				口縁部	石英，長石	内外面茶褐色	外面ナデ 内面ナデ
第 11 図 17	小型鉢				口縁部	長石細片，長石	内外面淡茶褐色	外面ナデ 内面ナデ
第 11 図 18	小型鉢				口縁部	長石細片，長石	内外面淡茶褐色	外面ナデ 内面ナデ
第 11 図 19	壺				胴上半	石英，長石，赤色スコリア	外面橙褐色 内面淡褐色	外面沈線区画内羽状縄文　無文部赤彩か 内面ナデ
第 11 図 20	壺				頸部	赤色スコリア，黒色粒	内外面淡橙褐色	外面結節文下に縄文施文 内面ナデ
第 11 図 21	壺				胴下半	石英多含，長石，雲母	外面赤褐色 内面黒灰褐色	外面赤彩 内面ナデ
第 12 図 22	壺				胴上半	石英多含，黒色粒	外面淡褐色 内面淡橙褐色	外面附加条縄文＋単節縄文 内面ナデ
第 12 図 23	壺				胴下半	石英，黒色粒，小石粒	内外面淡橙褐色	外面単節斜縄文施文 内面ナデ
第 12 図 24	壺				胴上半	石英，小石粒	内外面淡橙褐色	外面単節斜縄文施文 内面ナデ
第 12 図 25	壺				胴上半	石英，砂粒	内外面淡赤褐色	外面単節斜縄文施文　煤付着 内面ナデ
第 12 図 26	壺				胴上半	石英，砂粒	外面茶褐色 内面淡橙褐色	外面単節斜縄文施文　煤付着 内面ナデ
第 12 図 27	壺				胴上半	石英，黒色粒	内外面淡褐色	外面附加条縄文＋結節文＋単節斜縄文 内面ナデ
第 12 図 28	甕				胴下半	石英，小石粒，長石	内外面茶褐色	外面　縄文施文 内面火熱を受ける
第 12 図 29	壺				胴下半	石英多含	内外面淡褐色	外面単節斜縄文 内面ナデ
第 12 図 30	壺				胴下半	石英多含	内外面淡褐色	29 に同一個体
第 12 図 31	甕				胴下半	石英，長石，長石細片	内外面茶褐色	外面附加条縄文を施文 煤付着 内面ナデ
第 12 図 32	甕				胴下半	石英，長石，長石細片	外面茶褐色 内面黒灰褐色	外面附加条縄文を施文　煤付着 内面ナデ
第 12 図 33	甕				胴下半	石英多含	内外面暗褐色	外面単節斜縄文＋結節文　上部に煤付着 内面ナデ
第 12 図 34	甕				胴下半	石英，長石細片	外面茶褐色 内面黒灰色	外面附加条縄文＋結節文 内面ナデ　コゲ付着
第 12 図 35	甕				胴上半	長石細片	外面黒褐色 内面茶褐色	外面縄文 内面ナデ
第 12 図 36	小型土器				胴上半	長石細片	内外面茶褐色	外面縄文 内面ナデ

03D 住居跡遺物観察表

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第 14 図 1	装飾壺	最大径 〔30.0〕	10.8	〔9.0〕	底部～ 胴下半	黒色粒，石英	内外面淡黄褐色	外面ナデ 内面ナデ　器面荒れ剥離
第 14 図 2	甕		最大径 18.4	〔9.8〕	胴上半 ～下半	長石多含，石英	内外面橙褐色	外面ナデ状ヘラケズリ 内面ナデ　胴下半にコゲ痕跡
第 14 図 3	甕	22.1	最大径 24	〔17.2〕	口縁～ 胴下半	長石細片多含，石英	内外面橙褐色	外面工具内外刺突による波状口縁　8 段輪積みだがナデにより，すり消される　内面ミガキ状ナデ　外面胴部中位下に煤付着
第 14 図 4	甕	21.8	6.4	23.3	口縁～ 底部	黒色粒多含，石英	内外面淡褐色 ～淡黄褐色	外面工具内側押圧による波状口縁　8 段輪積みだが浅い 内面ナデ　外面口縁部と胴中位下に煤　内面底部にコゲ
第 14 図 5	甕	24	最大径 20.8	〔12.7〕	口縁～ 胴中位	長石細片多含	外面暗褐色 内面淡橙褐色	外面工具内外押圧による波状口縁　無文帯　結節文下附加条縄文 内面ナデ　口縁上部に浅い稜　外面中位に煤付着
第 15 図 6	甕	17.4	最大径 18	〔11.2〕	口縁～ 胴中位	ち密	内外面橙褐色	外面工具内側押圧による波状口縁　頸部刻み目文下に単節斜縄文 内面ナデ　口縁上部に浅い稜　下に外面同様の刻み目文
第 15 図 7	甕	10.6		〔4.3〕	口縁部	長石細片，砂粒	内外面 淡橙褐色	外面単口縁　ナデ 内面ナデ
第 15 図 8	甕		最大径 〔16.4〕	〔9.6〕	胴下半	石英多含，黒色粒 長石	内外面淡黄褐色	外面単節斜縄文 内面ナデ
第 15 図 9	甕		5.8	〔4.4〕	底部	石英，長石細片	内外面淡黄褐色	内外面ナデ
第 15 図 10	甕		5.8	〔2.3〕	底部	石英，長石細片	内外面茶褐色	内外面ナデ
第 15 図 11	甕		5.4	〔3.3〕	底部	長石細片多含	外面茶褐色 内面黒褐色	外面附加条縄文 内面ナデ　コゲ付着
第 15 図 12	壺				口縁部	石英，小石粒，黒色粒	内外面橙褐色	外面折返し口縁上に羽状縄文下部に刻み目文　縄文部に赤彩 内面ナデ
第 15 図 13	壺				口縁部	石英，小石粒	内外面橙褐色	折返し口縁部に棒状浮文貼付け
第 15 図 14	装飾壺				胴上半	石英，赤色スコリア 黒色粒	内外面淡橙褐色	外面山形沈線文区画内に縄文施文　赤彩（ミガキ） 内面ナデ 剥離著しい
第 15 図 15	甕				胴下半	長石細片　ち密	内外面淡茶褐色	外面附加条縄文施文 内面ナデ
第 15 図 16	蓋				端部	石英，長石細片	内外面淡茶褐色	内外面ナデ

04D 住居跡遺物観察表

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第 16 図 1	装飾壺		頸部径 8.2	〔8.8〕	頸部	石英，黒色粒，小石粒 長石細片	内外面淡橙褐色	外面無文（赤彩）　結節区画内羽状縄文　無文（赤彩） 内面ミガキ（赤彩）
第 16 図 2	甕	16.6	最大径 16.8	〔11.1〕	口縁～ 胴下半	長石多含	外面赤褐色 内面黒褐色	外面工具内外面押圧の波状口縁　胴部上位に刻み目文　全体にナデ 内面ナデ
第 16 図 3	甕		最大径 16.2	〔10.4〕	胴上半 ～下半	長石細片	内外面淡橙褐色	外面無文（ナデ）　上位 2 列の刺突文　無文（ナデ） 内面ナデ　内面下位にコゲ付着
第 17 図 4	甕	最大径 〔23.4〕	7.2	〔10.4〕	底部～ 胴下半	石英・長石，銀雲母	外面暗褐色 内面茶褐色	外面ナデ 内面ミガキ状ナデ
第１７図 5	甕	最大径 〔19.0〕	6.4	〔5.1〕	底部～ 胴下半	長石，石英　ち密	内外面淡灰褐色	外面ナデ 内面ナデ　底部内面コゲ
第 17 図 6	甕	15.8		〔8.1〕	口縁～ 胴上半	長石細片多含，小石粒， 石英	内外面淡茶褐色	外面工具外面押圧の波状口縁　頸部円形刺突文　結節文＋附加条縄文 内面ナデ
第 17 図 7	壺				胴上半	長石細片，石英　ち密	内外面淡赤褐色	外面無文（赤彩） 内面ナデ
第 17 図 8	甕				胴下半	長石細片	内外面淡茶褐色	外面不規則な附加条縄文 内面ナデ
第 17 図 9	甕				胴下半	長石細片	内外面淡茶褐色	8 と同一個体か 内面ナデ
第 17 図 10	甕				胴上半	長石細片，雲母細片	内外面暗褐色	外面附加条縄文 内面ナデ
第 17 図 11	甕				胴下半	長石細片	内外面暗褐色	10 と同一個体か　附加条縄文施文
第 17 図 12	甕				胴下半	長石細片	内外面橙褐色	外面附加条縄文 内面ナデ
第 17 図 13	甕				胴下半	長石細片，石英	内外面茶褐色	外面附加条縄文 内面ナデ　コゲ付着
第 17 図 14	甕				胴上半	長石，雲母	内外面暗褐色	外面附加条縄文 内面ナデ
第 17 図 15	高坏				脚部	石英，雲母，黒色粒	外面赤褐色 内面茶褐色	外面ナデ 内面ナデ
第 17 図 16	砥石							下部欠損　長辺 5.9cm×短辺 3.7cm　厚さ 1.2cm　重量 36.0g　石材軟砂岩か　二面において磨られている。
第 17 図 17	砥石							軽石　長辺 4.1cm×短辺 3.4cm　厚さ 2.9cm　重量 7.6g　断面三角形 二面において磨られている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし　ひらさわいせきびーちてん
書　　名	千葉県八千代市　平沢遺跡ｂ地点
編著者名	森　竜哉
編集機関	八千代市教育委員会
所　在　地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　　TEL.047(483)1151　代表
発行年月日	西暦　2011年　（平成23年）　8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平沢遺跡ｂ地点（ひらさわいせきちてん）	八千代市字平沢（やちよしあざひらさわ）158-1 ほか	12221	217	35度 44分 42秒	140度 7分 40秒	20100128 ～ 20100421	1,740	社会福祉 施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平沢遺跡ｂ地点	包蔵地	旧石器時代	なし	尖頭器　剥片	
	包蔵地	縄文時代	ピット　２基 遺物包含層	後期土器片 早期～後期土器片	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡　４軒 ピット　１基	後期土器片 中期土器片	
	包蔵地	奈良・平安時代	溝状遺構　２条 ピット　８基	なし なし	

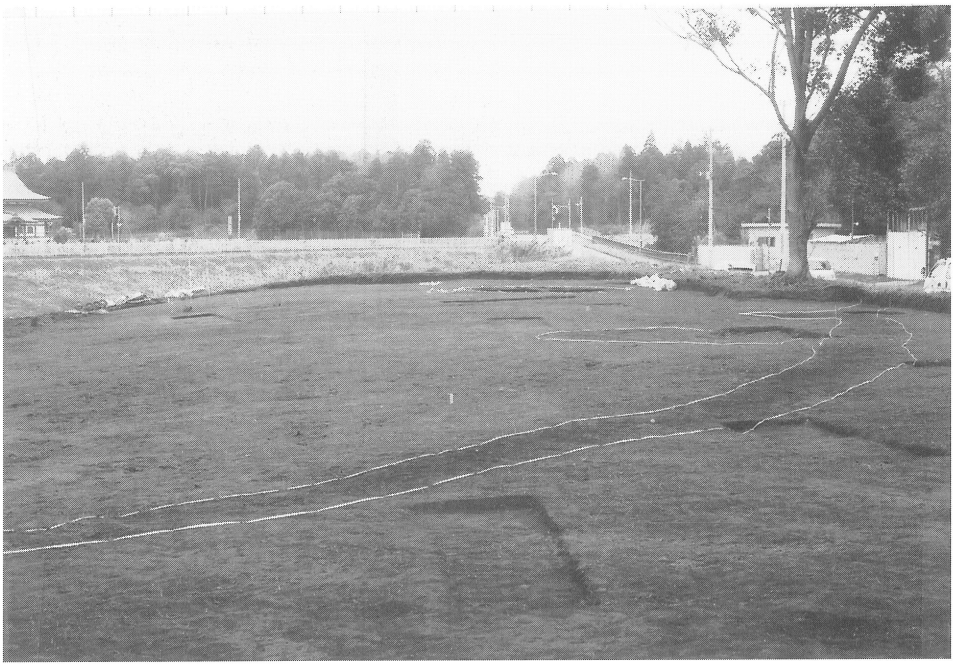
要　約	検出した遺構は縄文時代後期ではピット２基である。弥生時代ではピット１基，竪穴住居跡４軒である。ピットは中期に帰属すると遺物から想定される。住居跡は後期中葉から後半に位置づけられる。奈良・平安時代では，遺構に伴う遺物が出土していないが，確認面の高さや覆土の状態から弥生時代以降の奈良・平安時代を想定した。溝２条とピット８基が検出された。 遺物は旧石器時代の尖頭器，縄文式土器では，早期中葉・後半，前期中葉・後半，中期前半，後期前半と各時期の土器片が出土した。弥生時代では，中期土器，主体となる後期土器群が出土した。

写　真　図　版

図版１　　ー遺跡全景・プラン確認状況ー

南側全景
02･03･04D
02M

南側プラン確認
状況

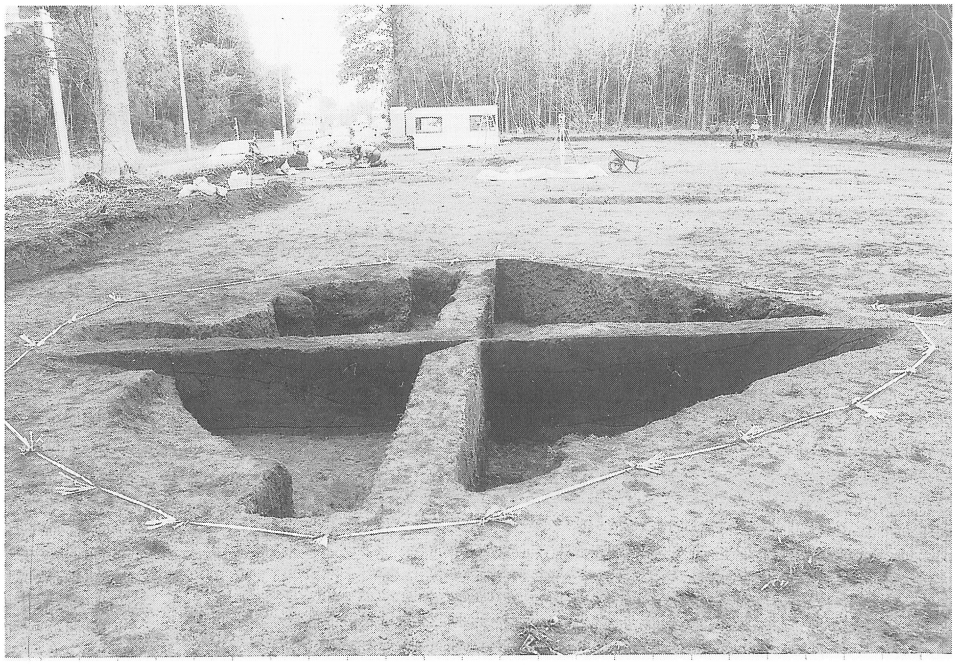


北側プラン確認
状況

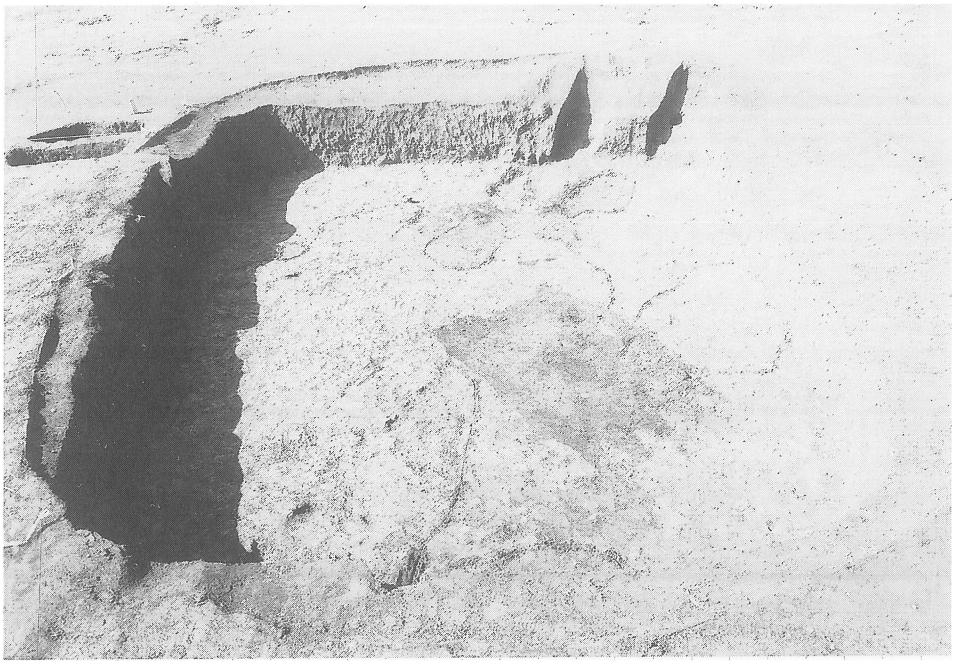
全景（南から）
01・02・03・04D
02M

全景（北から）
01D 中心に 03P
11P 及び南遺構群

全景（南から）
03D 中心に 02M
02・04D



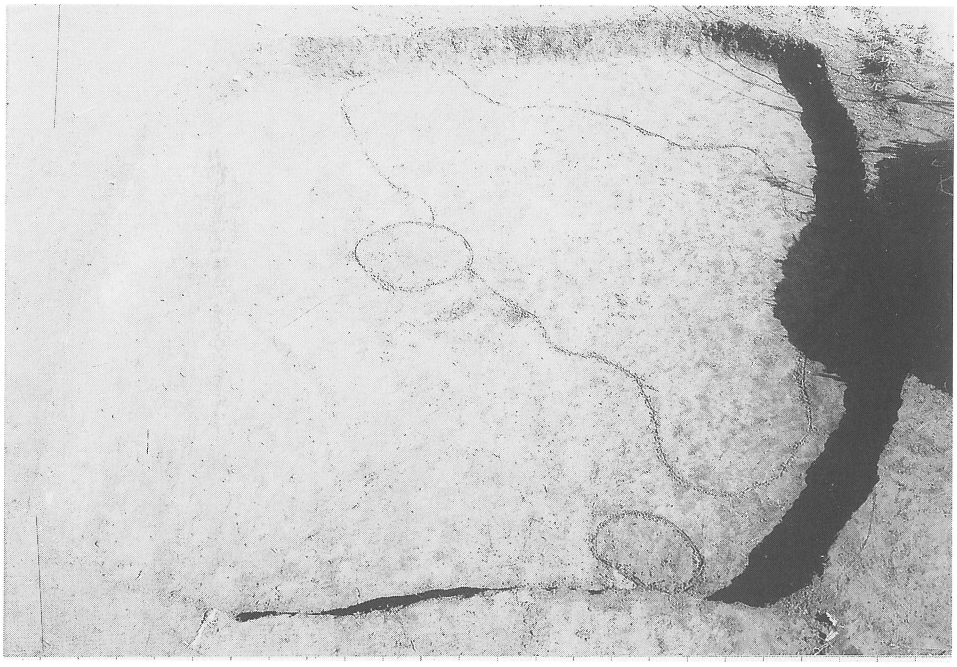
土層断面（北から）



床面精査状況
（東から）

完掘（西から）

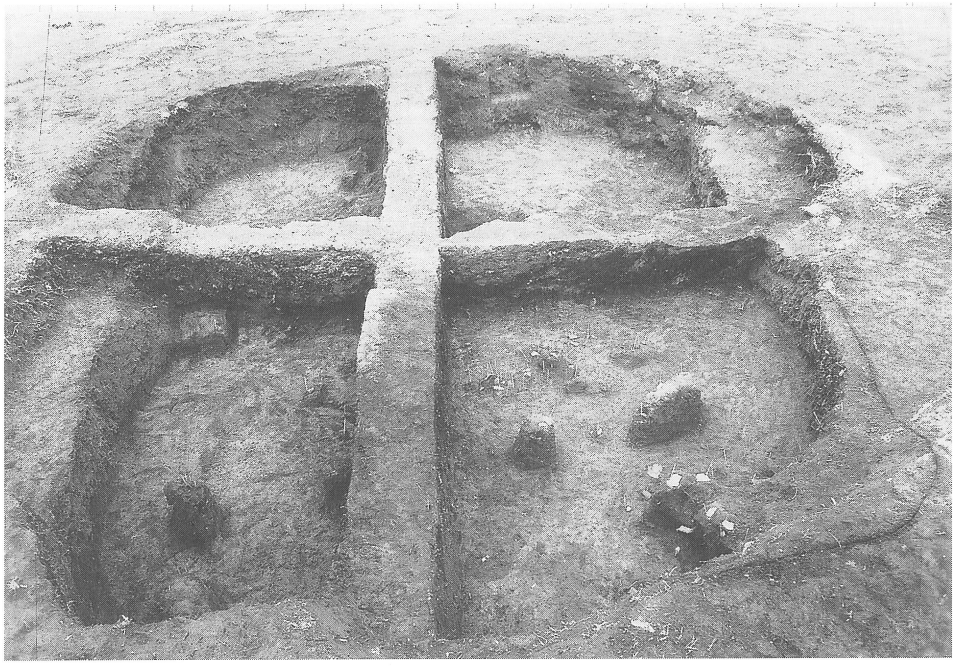
遺物出土状況
（南面から）



床面精査状況
（南から）

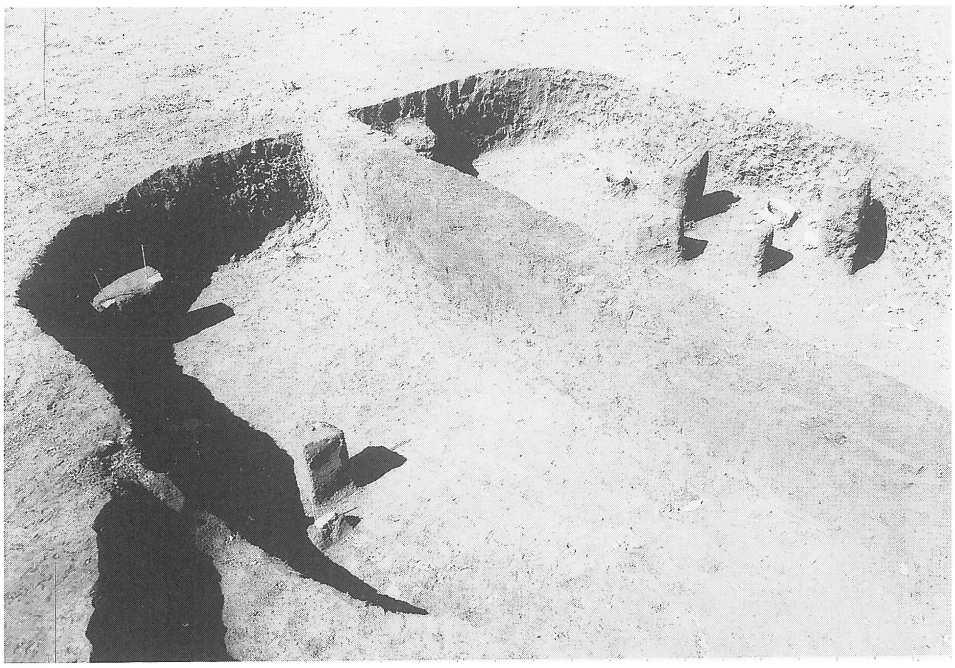
完掘（南から）

プラン確認状況
（西から）



遺物出土状況
（東から）

完掘（東から）



遺物出土状況
（南東から）

炉検出状況
No. 2·6 出土状況
（南から）

完掘（南から）

北側部分完掘
（南から）

南側部分完掘
（南から）

中央部分完掘
（南から）

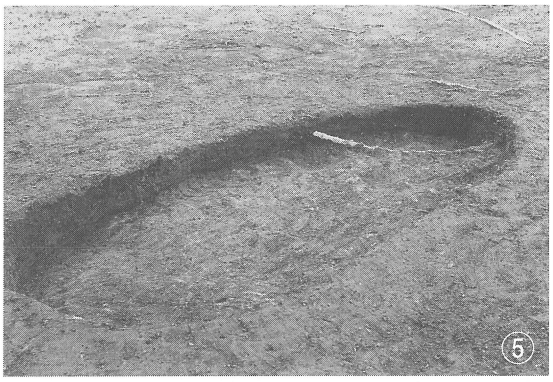
遺物出土状況
（南から）

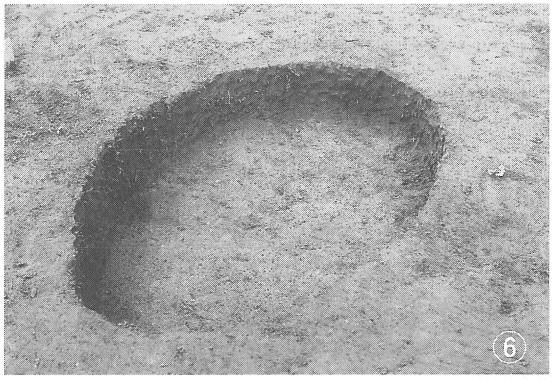
土層断面
（南から）

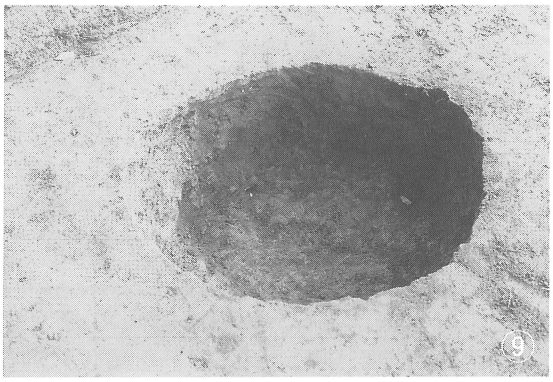
完掘（北東から）

図版 9

ーピットー

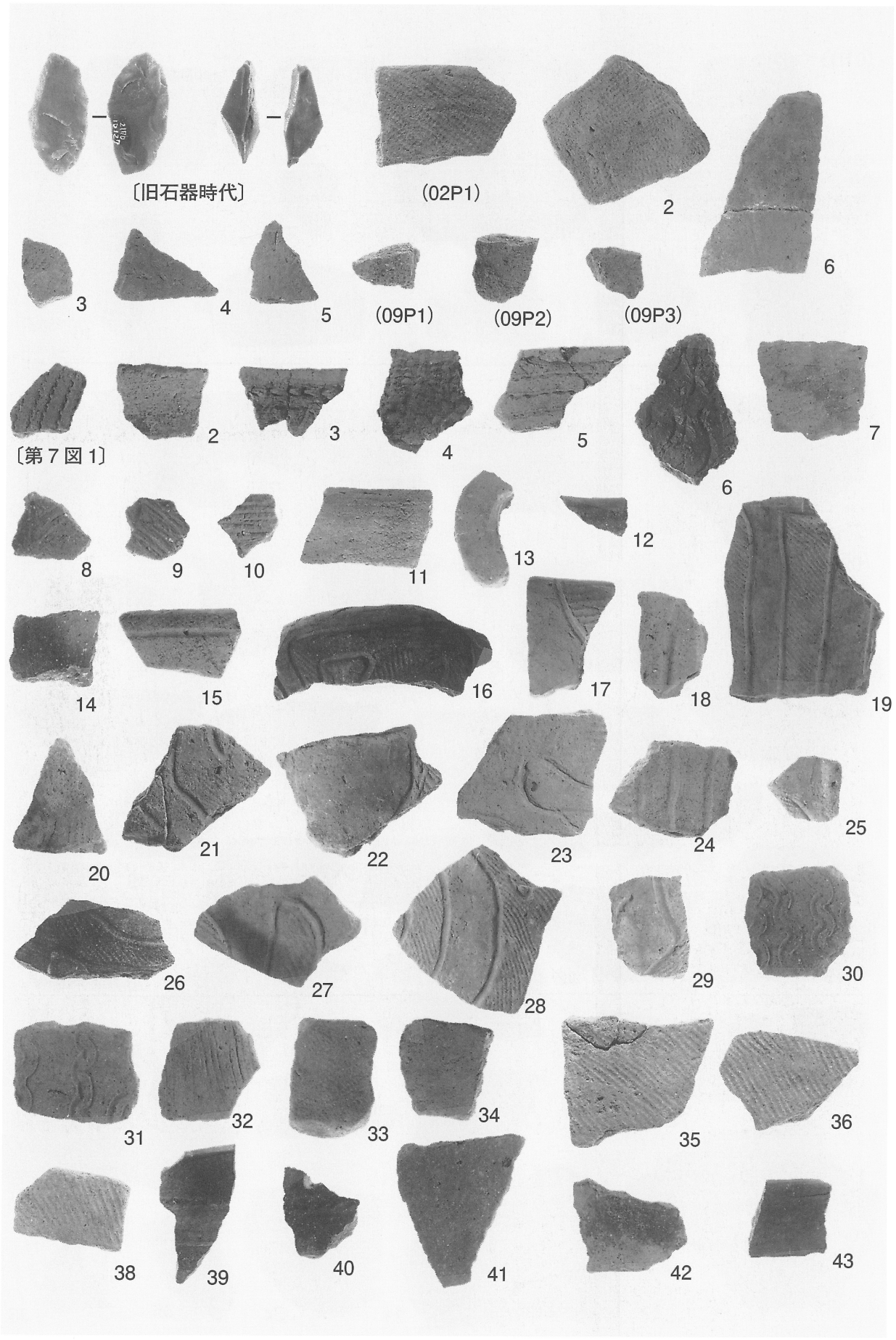






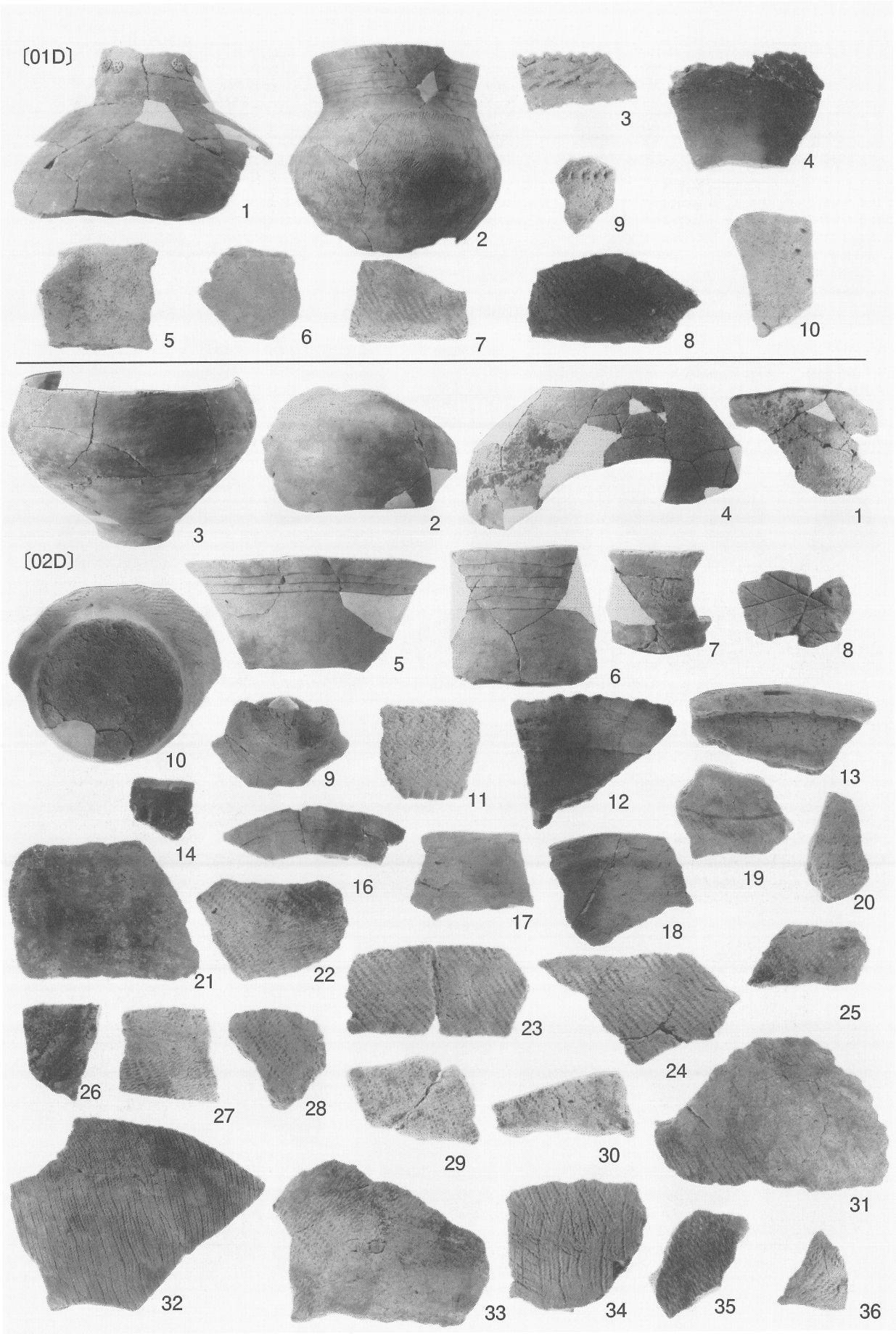
① 01P 完掘　② 04P 完掘
③ 05P 完掘　④ 06P 完掘
⑤ 07P 完掘　⑥ 08P 完掘
⑦ 09P 完掘　⑧ 10P 完掘
⑨ 11P 完掘

〔旧石器時代，縄文時代ピット・包含層遺物〕

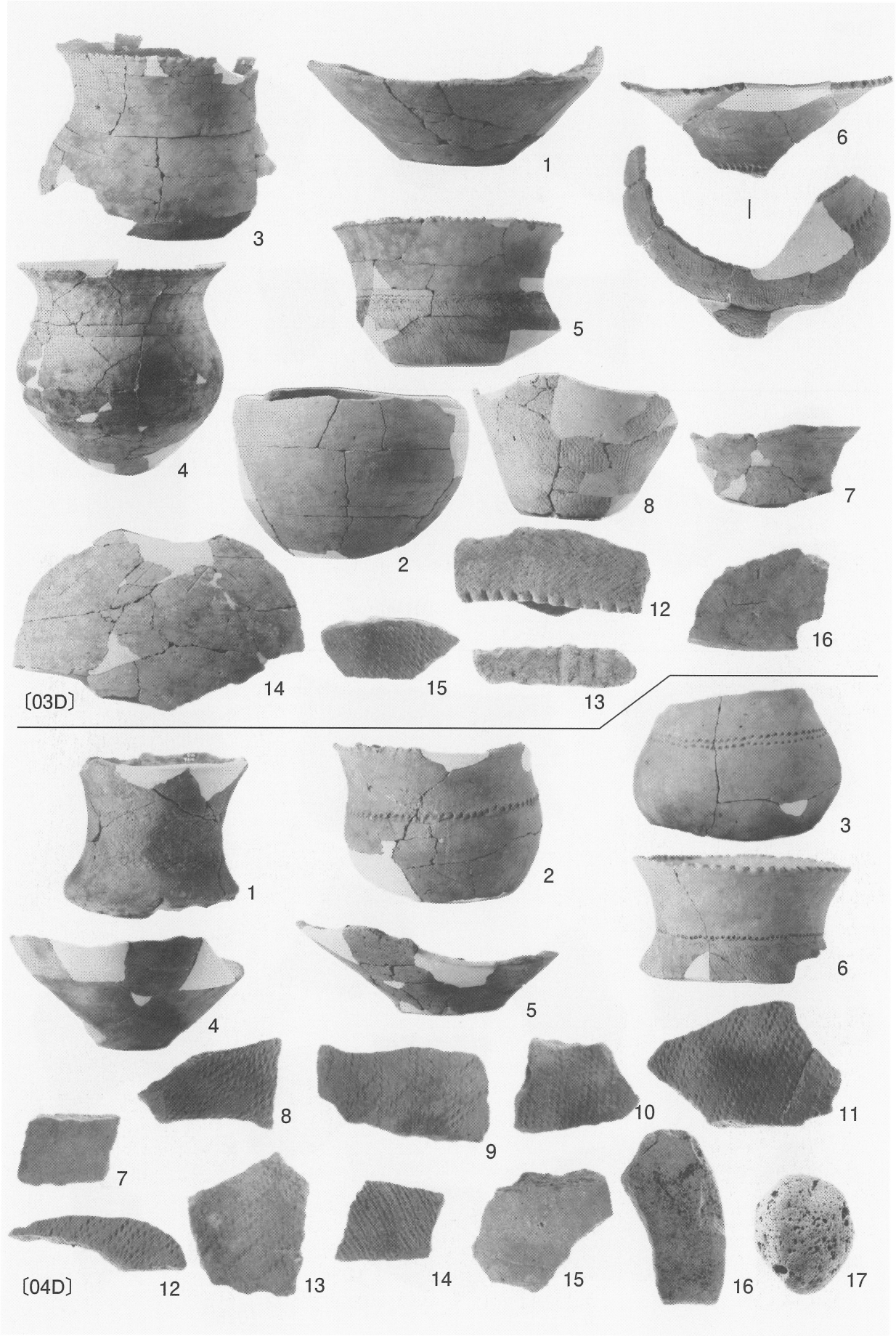


図版 11

〔01D・02D 出土遺物〕

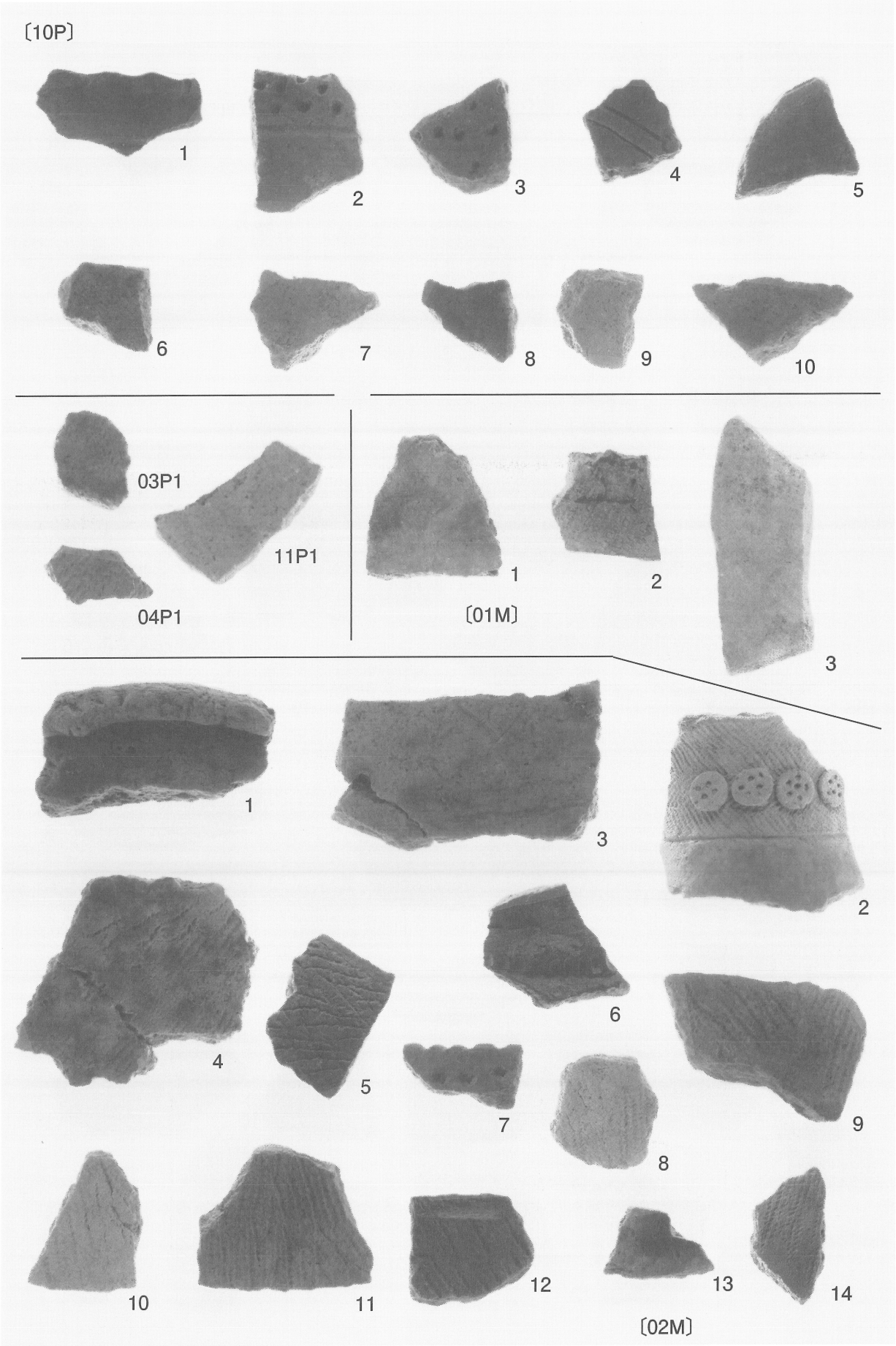


〔03D・04D 遺物〕



図版 13

〔ピット・01M・02M 出土遺物〕



千葉県八千代市

平沢遺跡b地点

2011

印刷日　2011年8月31日
発行日　2011年8月31日

編集　八千代市教育委員会
〒276-0045　八千代市大和田138-2
TEL. 047-483-1151
発行　社会福祉法人鳳雄会
株式会社アップルズ総合計画